女學雜誌

一冊六錢

各土曜日發兌

第百九拾七號

當府内無郵税

郵税五厘

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 197. 25TH JANUARY. 1890.

EDITORIAL :—Home, the Nursery of the Righteous. Theory and Practice concerning the Improvement of Society.

LEADING ARTICLE :—Japanese Literature and the Bible.

CRITICAL NOTES :— "Ashi no Hito-fushi," "Wasure Gatami," "The Biography of Richard Cobden."

MISCELLANEOUS :—An Affecting Story. To Mr. Unbōshi. (Bimyōsai Shujin). Before and After Meals. Improvement of Manufacture of Japanese Confectionaries. Four Pieces of Poetry (Mrs. Shoen).

A Fine Story about a Child. Last Night's Dream. Where is now my Father? (Mr. Sugiura) Reason why we wash the Face.

OPEN LETTERS :—

NOTES ON THE NEWEST ISSUES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

SINCE OUR LAST ISSUE.

第百九十七號目錄

社説　姦淫論○社會改良論は必らずや實際に遠し
論説　日本文學さ聖書
批評　「蘆の一ふし」○理査士、格武電
雜錄　感動すべき美談○雲峯子に(美妙齋)○食前食後○菓子改良論○詩四首(湘煙女史)○小供の美談○よべの夢○父上今は何處に(椙郁居士)○顏を洗ふ譯○人の長所、短所
小説　イナツク、アーデン物語
寄書　先づ廢妾より始めよ(依田雄甫)○偶感六則
開書　熱涙以て清淨なる都人士に訴ふ(大和郡之助)○女學先生及び他の方々に報ず(岸田不美)○究詢
時事　雪蹬々○北海離宮○英國女王陛下、婦人白標倶樂部○五丈原頭の孔明○日本人增殖の策○武藏野○矢野龍溪君○看護婦○廢妾論、廢藝妓論(藝妓知事の名代たり○菓子○加藤博士の進化論○一夫一婦の制言べくして行ふ可らず○廢娼記事
女報　娼歎專門學校○看病婦養成○內外人の結婚數○女紅場始業式○婦人慈善會○高等女學校

WOMEN IN JAPAN.

(1) *On the evening of the 4th inst. Messrs. Furusho, Tai, Ishijima, Ban and Iwamoto delivered lectures in behalf of the "Haisho Sōnen Gikai" or the Young Men's Association for the Abolition of Prostitution, at the hall of the Kosei Kan, Kobiki-cho, Tokyo, on the necessity of abolition of licensed prostitution. The hall was crowded by some 800 audience and the meeting closed amidst great cheers and applause. The same association is said to be intending to publish a monthly journal called the "Haisho."*

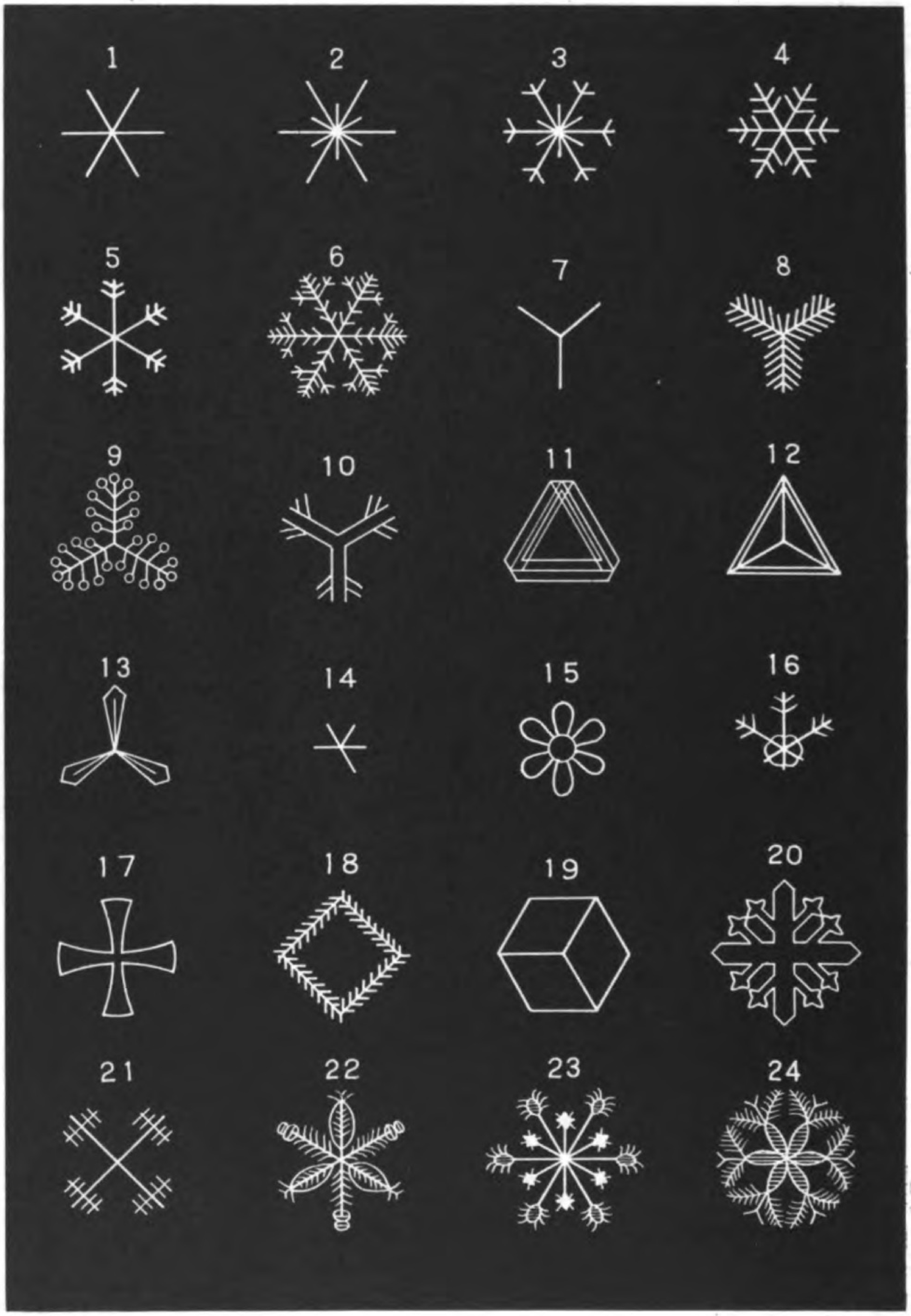
(2) *The Provincial Assembly of Miyagi passed a resolution, on the 23rd ult., with very great majority, to abolish licensed prostitution in that province within 3 years hereafter.*

(3) *Some ladies in Tokyo have just formed the Horticultural Association. The association is said to have a horticultural show twice a year. The first show for this year will be held on the latter half of coming March.*

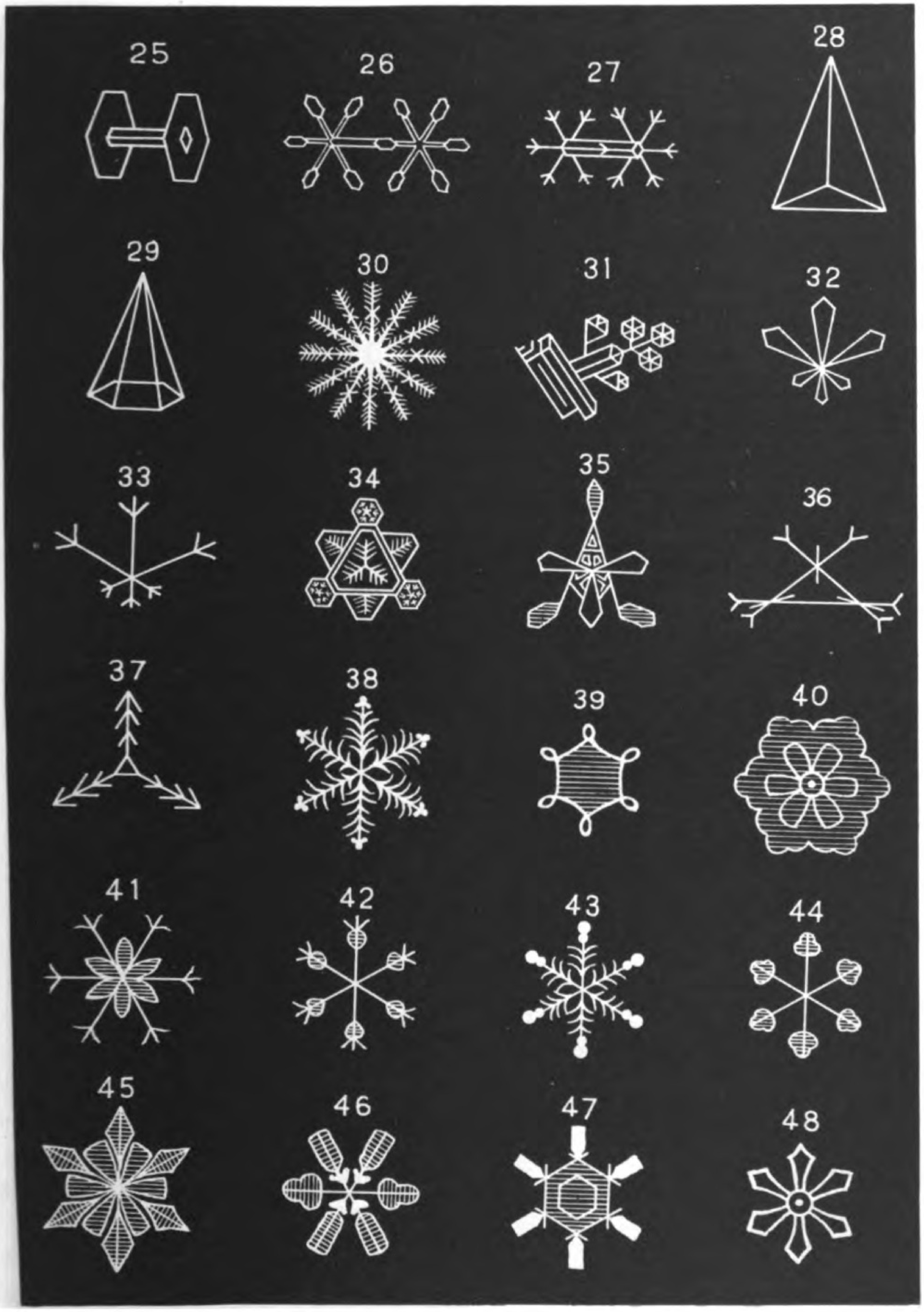
(4) *The four girls' schools, namely, Doshi-sha Jo-Gakko, Kobe Ei-wa Jo-Gakko, Baika Jo-Gakko, Sanyo Ei-wa Jo-Gakko will in conjunction publish a monthly literary journal entitled the "Tsubomi" or the Bud. The first number will appear at the end of this month.*

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

顯微鏡下最近の雪片試驗



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百九十七號

明治二十三年一月廿五日發兌

社説

○姦淫論（中）

善人養成の庭は家族にあり

ダル井ン云へらく、人は猿猴と祖先を同ふすと、吾人玆に其説の可否を論ぜずと云へども、密かに人間の態狀を考ふるに甚たく動物に似たる所ろ少しとせず、常には彼れ豺狼の如く肉を食はずと云へど一と度餓るときは愛兒をも殺すとあり、平素人の不幸に泣くとありと云へど若し激して怒るときは血を啜りて倘微笑むとあり、其猛獅暴虎を去ると遠しとせず況んや猿猴に比しては其の差ふとの甚はだ少なきを見るなり。然りと云へども此は是れ彼が慾情の忌わしきそのみ特に摘發したるなり、彼或は慘酷なるとありと云へど亦極めて仁慈なると多し、其衷心を穿てば何人か善を喜び不義を惡まざる事あらん、若し正烈信忠の談しを聞くときは感奮して立ち、身も亦敢て然らんとを欲して義しきに勇まずと云ふとなし、孟子云はく、人皆な羞惡の心あり惻隱の情ありと、擇んで善に移らんとを欲せざるもの殆んど稀なり。左れば人は或は動物たり、或は人間たり、其一部面に於ては猿猴よりも醜惡にして、他の一部面に於ては天使よりも美なり、細かに察するときは聖人の胸中倘ほ奸極の惡あり、恕して考ふるときは盜賊の心胸倘ほ純潔の念ひなきにあらず、蓋し人は恰かも二個の人を合はするに似たり、一は善ならんとを欲し他は不義ならんとを欲し、一は人間たらんとを欲し他は動物たらんとを欲す、心中宛ながら二人あり內外に分れて相戰ふの心地す、わが願ふ所ろの善あれども之を爲すとを得ず、願はざる所ろの惡あれども之を去るとを得ず、反つて思はざる所ろの不善を遂るとあり、蓋は「內なる人に就ては神の律法を樂しめども、わが肢躰に他の法ありて我心と戰かひ我を擄りこにして我が肢躰の中に居る罪に從はする」を覺ゆるなり。

然らば人を養ふに道を得ざるときは同じきの人間も或は善となり若くは不善となるべし、若し彼が善性を育つるときは彼は善人となるべし、若し彼が惡質を育つるときは彼は惡物となるべし、大凡ろ物は之を養ふによりて育つ育つによりて發達す、支那婦人の足は之を小さくするによりて縮小し郵便脚夫の足は用ゆるによりて彌よ丈夫となる、苟くも之を用ひ伸ばすに於ては夫れ丈に發達せずと云ふとなし、左れば人を養

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ふて其善性を育つるときは彼れ或は聖人の如くなるべし、不幸にして其惡性を伸すときは其の猿猴に類し豺狼獅虎に匹ひせざるは殆んど稀れなり。

果して然らば人の善性を養ふの所ろは抑も何處にてある、社會か、教會か、學校か、幼稚園か。

社會は優勝劣敗の戰場にして利害成敗の運冷酷に行わる、其喜こぶ所ろの笑は敵に勝ちたるの笑ひにして、其泣く所ろのうめきは敵を怨み憤ふるの聲なり、算盤のひゞき冷たく鳴り、勘定の音物すごく響く、優れるは高ぶり劣れるは憂ひ、得たるものも尙ほ煩ひ失ひたるはいよ〳〵困しむ、實に人世は地獄に似たり、古人喩えて之を憂き世と云ふ、蓋し淚の谷、歎げきの底なり、嗚呼此如き社會は安んぞ能く人の善性を養はん、彼をして冷酷ならしむるとは或は之あらん、彼をして敵對に鋭利ならしむるとは或は之あらん、彼をして憂きにあきらめ難みに堪へしむるとは或は之あらん、若し夫れ彼をして人間の人間たる愛情犧牲の美德に圓滿ならしむるとに至りては、社會彼自身の教養の決して行ない得べからざるものなり。

但だ夫れ彼の教會と云ひ、學校と云ひ、幼稚園と云ふもの丶類ひは、即はち稍や得て此の美德を養ふの場たりと云へども、更に他の一を欠くときは彼等亦た全く効あるとを得ず。

所云る他の一つとは即はち家族にてあるなり、家族は是れ幼稚園の初め、學校の基ひ、教會の更に聖となりたるものなり、其内には利害の勘定あるとなし、富貴名聲のけじめあるとなし、冷評罵詈の恐れあるとなし、之を愛するの愛に僞はる所ろなく、之を怒るの怒りに毒氣あるなし、若し幸あるときは共に笑ふ、若し不幸あるときは共に悲しむ、其淚に塵を混ぜず、笑ひに飾るとなし、總べて是れ眞情眞實より發す、而して互ひに痛み相ひ喜こび同感同情の念たゆるとなし、若し僞はりは僞を生ずとせば、只だ愛のみ能く愛を生ずるとを得べし、彼の人間の人間たる美德を發育するの地はたゞ夫れ此の如き家族にある哉、家族の土にして初めて愛情を生じ、家人の淚にして初めて同情を露はす、若し愛情同感なきの人を以て眞の美なる人間にあらずとせば、眞美の人間を養成するは實に只だ家族にあり、家族なくんば玆に人あるとを得ず、否な家族にして眞の美なる家族にてあらずんば則はち遂に美なる人あるとを得ざる也。

吾人かの食客の長じてのち冷々寒々たる殘酷の人となるを認とむ、之を父母恩愛の下に撫育せられたるの子に比較すると

きは、殆んど春夏に澤々滋々としたる綠草を見て、乍まち秋冬の枯木落葉を見る心地す、而して之を見るに於て其差ひの甚しきのみにあらず、凡そ犧牲獻身的の善美高潔あることに至りては彼の冷々寒々たる輩らの決して窺ひ得ず敢て行ひ得ざるの業なりとす。

左れば眞の人を生ずるの地は家族にあり、而して眞の人をして常に能く人たらしむるものも亦た家族にある也。

國家盛衰强弱の差は家に起る

蓋し人をして能く人たらしむるも亦た家族にあり、家族若能く之を慰さむれば人に失望あることなし、家族もし能く之を勵まさば人に落膽あることなし、人の世に出でゝ事を爲すは之を戰ひに譬ふべし、彼れ屢ば戰ひに負くることあり、左れど家に歸りて慰藉獎勵を受くること豐かならば彼は亦た新たなる生力を以て出陣すべし、古來万千の戰塲に軍殆んど敗れ將に崩れんとするもの僅かに少數の生兵を得て軍氣復勃し一轉敗を反へて大勝したるもの頗ぶる多し、喪心するもの家に歸りて慰さめを得更に勇を復して世に臨むの狀恰かも之に似たり。

特に强者を敵にするは勇士の懼れざる所ろなれど、身方に裏切するものを持つは剛猛の人と云へども尙ほ堪えざる所ろなり、彼の正義の人世に立ちて不善と戰ふ、蓋し幾多の艱苦に會ふと云ども敢て能く忍ことを爲べし、但だ夫れ其の家に於て之に反くものあるときは彼れ安んぞ堪へん、パッシー曰く余れ家の外に於て暴風迅雷にあふとき敢て意となさゞりき家の内に於て妻子の罵りを聞ときは殆ど忍ことを得ざりしと、クッスト は滿世の敵となりて身尙ほ歎く所なし只だ其の三年同伴の子弟之を敵に賣んとするを知ては太く憂ひて血汗を落すに至りぬ、左れば尋常の人に於ては家族の反對に逆ひて能く思ふ所ろを成就することなし、一と度び志を立てゝ高義に趣くと云ども家累の之を誘ふに由りて遂に挫折するもの古來極めて多し、如此き人にして若し家族の同情を得、家族の獎勵を受けば、彼を後りへに引戻すの魔力は之を驅つて陣頭に奮進せしむべし、勇氣層培して其志を達せざると至りて少なし。

且や人は其家族に於て樂しむことを要す、家族の外に於て樂しむの習ひあれば德必らず立つことなし、蓋し人は人を愛するより喜ばしきはなく、其愛する所ろのものと談笑喜樂するより樂しきとあらず、草木を愛すれども草木言ふことなし、踏舞を樂めども踏舞に生命あることなし、只夫限りなきの樂しみは限りなきの愛に在て而して限りなきの愛は家族親子相愛するの

愛に在りとす、人若し此の眞愛眞樂に樂しむとを得ずんば彼が慾情は既に卑きに要めつゝあり、則はち外に出でゝ卑しむべきの事物を悦び、若しくは汚すべきの人に交はるに至らん、故に人の尤も樂しきは其の家にありて、而して其の尤も深き樂しみとすべきものも亦た家にある也、家や能く人をして樂しむとを得しめ、亦た能く眞の樂を得せしむ。

故に家は人を造り、人をして人たらしめ、亦た人たるの樂みを得しむ、若し眞の家族あらずば玆に人間を生ぜず、人間を長ぜず、人間を安んぜず、人は之あるが爲めに初めて其美性を發育し、善業を成就し、且つよく和樂するとを得るなり、苟くも家なからんか、人なし、善美なし、幸福なし、と云ふも尙ほ不可あるなし。

左れば家をして眞の家たらしむるときは善人を出し善業を成し國家を幸にす、家をして家たらしめざるときは人を殺し善事を廢し國家を害す、家や是れ低軒茅屋の一小戶のみ、然れども天下家國の榮枯盛衰は全く其の齊ふと齊はざるとに關す、支那の聖人曰く家齊ひて而して后ち天下治まると、西國の政治家曰く、國政の眞否は茅屋の內にありと、果して然らば家や眞に小にして關はる所ろ眞に大、政治家、敎育家、宗敎家の均しく着目注意すべきの要境にして、之が整不整幸不幸は延きて滿國全天下に大影響するとを確認するを得るなり。

而して姦淫の家族に於ける其の及ぶ所ろ果して何如ん其の關係する所ろの淺深濁淸を察すれば則はち姦淫の國家に對するの毒害淺きか深きかを辨知するとを得。

○社會改良論は必らずや實際に遠し

卓然として秀論を吐き、遠く鑑みて社會改良の理想を宣言するものあり、人難じて曰く、汝の言や眞し然れども頓かに行ふ可らず、言ふも直ちに効なくんば寧ろ言はざるに若かずと、今の天下往々此の如き不信切の徒、思はざるの論客少しとせず。

見よ今日の天地何の所ろにか理想と實際との懸隔せざる地ある、行く所ろとして先進は宣言し、實際は頑着せり、たゞ夫れ宣言万を重ぬるに及びて實際は徐々として起ち上り漸く半步一步を進るなり、此時に於て初より預告先導するものあらざりせば、遂に一の進步なかりけるならん。

先づ哲學者に問はん、汝ちの論ずる所ろ果して今日に行はるべきか、プラトの理想共和國は果して當時に何の益かありし

。次に政論家に問はん、汝ちの論ずる所ろ果して今日に行はるべきか、自由黨の自由も改進黨の希望も果して今日に何んの實功を遂ぐる。次に衛生家に問はん、汝ちの講釋說敎は抑も幾干か實行せられ居るぞ、汝ち牛乳を勸め万人皆な酒に倒る、然れども汝ち尙ほ衛生の說を主張せざる可らず。道德家よ汝ちの道德論は現に何程行はるゝ。宗敎家よ汝ちの天國は現に何程傳はりたる。商業家よ汝ちの需要は現に何程廣がりたる。總べて汝等の望む通りには達するとなし左れど汝等は其講談說法計畫を廢するとなけん。何んとなれば左樣にするとの遂に理想を持來すとなりとして佇望すればなるべし。然るに社會改良にのみ何を以て其理想の高きを妄なりとする、社會改良論の通りに得て社會の改良せられざるは社會の人の弱く且つ完からざるが故なり、恰かも是れ人不完にして、悉く衛生論に隨ふを得ず、悉く自由說を用ゆるを得ず、悉く哲學解に服する能はざるに類す、但だもし斷決して進む所ろあらば彼の政論家衛生家哲學者等の理想の則ハち實行せられ得るが如く、社會改良論も亦た則實行せらるゝを得べし。實行に難きを思ふて默するは凡庸の人のみ、苟くも社會を攪動して之を推進せんとせば、何人も先づ其理想を宣言絕叫せざる可らず、野に呼べる聲あり則ハちクリスト來れり、クリスト傳道せり則ハち門徒來れり、門徒万國に宣敎せり則ハち天國來れり、社會改良論の絕叫せらるゝ安んぞ無効ならん、怯なるものよ聞け、愚ハざるものよ悟れ、不信切なるものよ大ひに省みる所ろあれ。

論說

○日本文學と聖書

雲峯子

文學と云へば字義甚だ博し然れども今此處に題して日本文學と云ふも所謂純粹文學の意にして重に詩と小說を云ふものあり然れど詩と小說とは其實相似たるものにして只其寫影する所を異にするのみ即ち詩は天地の美を寫し小說は人世の有樣を摸す一は天然の眞理を發輝し他は俗界の眞情を畵く故に彼は其寫す所のもの美なるが故に其字句自ら美なり是は濁界の俗事を畵かんとするが故に文章自ら卑陋ならざるを得ず是れ詩と小說の異る所以なり然り人類世界は素と人類自ら罪惡に陷りて而して邪曲暴濁の世となれりと云ふと雖も是宗敎家の言にして文學的の眼孔を以て觀察せば畢竟自然の成行きと云はざるべからず既に自然の社會なり之を天地萬物の自然

なると何の違か之れあらん然れバ詩と云ふも小說と云ふも等しく自然の情景を摸寫描出する一の美術にして其度を分て一を高尙となし他を下等となす可からず若し詩を以て貴き美術となさバ小說も同じく貴ぶべき美術なり亦小說にして賤しむ可くんバ詩も亦貴ぶに足らず古來詩ハ世人の好尙する處にして小說の大に賤蔑せらるゝに至りし所以のものハ小說其れ自らの卑拙陋猥なりしが故にあらずして小說作者の罪と云ハざる可からず故に余ハ詩と小說とハ等しく貴重すべき文學なりと認む。

文學と宗敎　余ハ文學と宗敎ハ必らず離るべからざる緻密の關係を有するや否やを知らず然れども洋の東西となく國の如何を問ハず古來兩者の間に密接の關係ありて文學上に及ぼす宗敎の影響ハ實に尠からざりし事ハ確く信じて疑ハざる所なりされバ古來宗敎思想の發達せざりし國民の間にハ決して高尙なる文學なかりし今より數千年の昔に於てヒマラヤ山下印度洋の北岸に於て大に文學の發達せし所以のものハ一に彼の佛敎の起りしが故なるべし亦地中海の邊り希臘、羅馬、の古代に於て十九世紀の美術も尙及バざる所の彫刻を作せしも全く彼時代の偶像敎に依らずんバあらず（素より美術と文學と全く同一に非ずと云へども其根元たる思想に至てハ大に異る事なし）亦降て歐洲今日の文學を觀るに基督敎の感化を蒙るの著大なるハ何人も明瞭に認むる所にして決して爭ふ可からざるの事實なりとす眼を轉じて我國の文學ハ如何と云へバ其今日文壇に片々猥雜たる小片小說に至つてハいざ知らず明治以前に在て小說家と呼バれ文學者と稱せらるゝ人々の著作多くハ佛敎若くは儒敎の影響を蒙らざるハなし依之察するに第十九世紀の今日迄ハ世界萬國の文學多くハ其國の宗敎と密接の關係を有し其感化を蒙りしや明かなり、然れバ今後ハ果して如何、其西洋諸國の文學に至つてハ既でに一定せるなり余ハ今更云ふ所なし只我國の文學即ち詩と小說に至つてハ其精神と云ひ文脉と云ひ甚だ幼稚にして未だ定る所なきが故に聊か考ふる所を陳述して識者に問はざる可からず。

文學の精神　凡そ一國の文學にハ一定の精神あるは恰も人間に一の靈魂あるが如し例へバ我國の文學ハ「無常」てふ事を精神となすの類なり是實に佛敎の影響にして和歌と云ひ小說と云ひ有名なる者一として無情と云る感情に依らざるハなし佛敎の說く如くんバ社會は實に濁世なり煩惱界なり、誰か五塵の火宅を免るゝ者ぞ人世頼みなき事朝たの露の如く波の上の

泡に似たり何人か無常を感じ墓なしと思はざるとあらん既に無常を感じ墓なしと思ふ何物を觀してか悲しく見えざらん哀れと映ぜざらん故に春日長閑なる時雲霞靉靆たる内爛熳たる櫻花を眺むるも悲しく夕陽西山に消え凉風肌を襲ふて九夏の煩熱を吹拂ふの好時候も秋とし云へば泣かざるべからざるもの丶如く思ふ其他水に鳴く蛙の聲も妻戀ふかと悲しく聞え鹿の鳴く聲を聞きて獨り寢の寂しさを喞ち或は故鄕が戀しとて泣き風の音が高しとて泣き日が暮れしとて泣き鐘が鳴ると云ひて泣き人が來ぬとて泣き雨にも雲にも月にも花にも雪にも泣かぬものなし京傳の小說は如何近松の院本は如何馬琴の著作は如何太平記を讀みて泣かぬ人なしと云ふは作者が泣て書きし故なるべし世を捨てし坊主すら或は人が戀しとて泣き或は鴫立澤に憐れを歌ひしに非ずや知るべし我國の文學は從來無常なる感情を精神となせし事を、之に反し歐洲各國の文學に至つては勇爽活潑なる一の希望を精神となせしを見る是實に基督教の感化聖經の影響なりウヰリアム、ハッズリッド氏嘗て此事を述べて曰く、

聖書の翻譯せられしより大家の著作に稗補せし事夥し是實に其内に含蓄せし宗教及び道德の感念を廣く世人に普及せしが故なり（中畧）聖書は一般人民の思想及び感情を一致せしめたり云々。

以て聖經の文學上に及ぼせし影響如何を察知するに足るべし余嘗てロボルト、ボルンスの作なる「カッタース、サターデー、ナイト」（土曜日に於ける茅屋の夕とも譯すべきか）と題する一詩を讀み僻偶陬偏の片田舍なる茅屋に於てすら尙且彼の如く聖經の光輝赫々として基督教の感化大なるを見よ彼國の文學上に非常の影響を及せしも豈偶然ならんや知べし彼の文學の精神とせし處は聖經に基く事を既に彼我宗教を異にして而して同からざる感化、影響を蒙りし事斯の如し亦何ぞ疑ん彼は希望的の文學となり我は悲哀的の文學に陷り彼は萬物を積極的に觀察し摸寫し我は消極的に觀察し摸寫せしとぞ。

文脉　以上述べし如く亦今後も尙文學は宗教の感化を蒙るべきものとせば我國將來の文學は果して如何なる宗教の感化を蒙るべきか余は文學と宗教の關係如何を知らず只過去の經歷に徵して將來を判するのみ然り過去の經歷に徵すれば文學には必らず一の高尙なる思想即ち神若くは佛の如きものを含蓄せざる可らざるが如し語を變て之を云ば宗教と伴はざる可らずと云に同じ、されば如何なる宗教に伴ふ可きか神道か、否

な、儒教か、否な、其此等に非るは論を待ず想ふに佛耶兩教の一なるべし熟々我國現時の文學を觀察するに一二小說家の外は全く宗教の感化を蒙るものなきが如し則ち在來の佛教と年に月に遠ざかり行くと云ふにあり是實に文明の大勢にして止を得ざる事と云ふべし斯の如くして若佛教と關係なきに至らば我國の文學は必らず他に伴隨すべき宗教を求めざる可からず余は信ず其宗教は必らず基督教なる事を亦信ず必らず基督教ならざる可からざる事を何となれば佛教の文學に與ふに精神なるものは既に述るが如く今後文明社會に適せざる可ければなり若一朝基督教の感化文學社會に普くして文學者皆聖書を熟讀するの時來らば我國文學の精神一定しハズリットの所謂「人民の性質感情を一致和合」するに至る可し此時に至らば千種万類の文脈も必らず一致するに至る可し何となれば聖書には啻に文學に勇快の精神を與ふるのみならず其文章亦絶妙の文字なるが故に必らず我國の文脈を統一するの力ある可ければなり今日世に行はるゝ日本譯の聖書の文章は勿論原書に比して大に劣る所あるべしと云へども之を尋常普通の文字に比すれば實に雲泥の差あるが如し余は聖書なるものは果して人類以上の者の手に成りしものなるや否やは此處に論ぜずと雖も其文章の絶妙なる事は斷信するものなり若英譯の聖書が英文字に及ぼせし影響の大偉なる事、ハズリットの云ふが如く亦人も余も信ずるが如くんば日本譯の聖書も多少我國將來の文學に影響感化を與ふる事疑ひなく何ほ此等の聖書及び其聖書の精神に感化鼓舞せらるゝ所ろの文章が異日我國の文學界に大影響を及ぼさんは、蓋し疑ひなかるべし余は其時の必らず來る事を信じ且速に來らん事を希望するものなり。

批評

〇女學雜誌新年附錄

蘆の一ふし　　挙子

嘗て「藪の鶯」を著はし世に初音を漏し好評を博されたる花圃女史の新著なる「蘆の一ふし」實に無難の出來、感服々々、其趣向格別斬新と云ふにもあらねど亦是とて指すべき欠點もなし今日の官吏多くは諂辭佞辨以て上官の好意を是買はんとする時に在てよし酒の上とは云へ局長との口論夫れが原因で非職との事、其人物の凡庸ならぬは一讀して知るべし亦此凡庸ならぬ人が頻りに飲酒に耽る樣は是れ謂東洋風の豪傑なる所以にして其心中に鬱勃たる慷慨不平の思ひ止がたく酒醉にま

ぎらして其思ひを散ずるにあるか將た亦意志の力能く其慾を制する能はざるものなるか何は兎もあれ官吏の實情穿ち得たりと云ふ可し此主人が遂に酒の爲め急病に倒れ其兒女之が爲めに勵むといふ所亦可なり。

兼て知己の中とは云ひがなら森本とお靜との結婚相談、橋渡の一言にて取極むるとはチト輕率に見えて不同意なり然りながら西洋主義とか自由結婚とか云ふとも今日の日本には到底行はれずつまり双親の云ふに任せねばならぬが今日の時勢と云はゞ是も世間の實情を穿てるものか。

文章に至つては平易流暢間々妙文あり其横濱の地を形容せる文に曰く、

(前畧)土地の繁榮、立連らねたる燈火に御國の光もかゞやきわたる心地ぞする、されど、けふ八重の汐路、行人を送る波止塲のかなしさ、歸る人を迎ふるうれしさ、さながら寄來る波はこの二種の涙あつめたりとも見ゆめり(下畧)

と、亦舟まさに發せんとす兄弟相別るの辭に曰く、

ア、おまへさんも丈夫で、りつぱなものになつてゝうだい御酒をおのみなさるなョほんとに二人切なのにおとつ様に別れて。 互に見合す顏おもはずおとす一雫。

是亦面白しと云ふべし讀み終て其短きを怨むのみ思ふに是は是短き蘆の一ふしにて他日余のふしぐも書きつなぎたらんには猶面白からん余は早く其日の來らん事を待つものなり。

終りに一ッ不審の點を申さば編首に「……奥方と令孃とは三十あまりと十七許……と」是が眞實の親子に有得べき年か「瓜をふたつと云ふも大小あるべく……」と云へば無論親子なるべし是思ふに活版屋の過ちなるべし如何?

○忘れ形見　なみだ

此篇が附錄中の壓卷なりしとは思ふに世の公評なるべし是は「蘆の一ふし」に比すれば一層優る所なるが如し其優る所は趣向も新しく文章もよろしき所あるにあり余平常言文一致の文を好まず一二大家の作の外は手に取りし事もなし然に此「忘形見」は實に面白く感ぜり作者其編首にものして云るは「固より小說抔云べきものではありません」と、然し余は立派なる小說と思ふ一小兒の舌頭を借て自叙躰にものす、思に余をして深く感ぜしめたる所以のものは小兒の心中及び奥方と小兒との愛情をよく穿てるにあり此奥方や不幸にしてはやく良人に別れ後やんごとなき子爵とやらんに嫁したれど何分昔の身分が身分なれば先の良人との間にもふけたる最愛の獨子と緣

を絶たざる可からざるに至れり世間悲むべき事多し然れど親子の別離程悲しきはなかるべし若別後相見る事なかりせば或は忘るゝよすがもあるべきが目前相見て而して親と名のり子と呼ぶ能はざるは實に苦しかるべし悲しかるべし「アヽ〱おつかさんが生て入しやれば好いにチー」と云れた時の奥方の心の中は果して如何ありしぞ此小兒のくりごと實に神に迫りて妙なり其「どうしたものか奥樣は僕を可愛やとおつしやらぬ計りにしつかり抱〆て下すつた事の嬉しさは忘れられないでよく夢に見い〱しました」と云ふに至つては是親子の愛情の溢るゝ計りなるを見る此語が無邪氣の小兒の口より出でしと思へば奥方と此小兒の親子なるは蓋し明瞭なりと云ふ可し然るに全篇其親子たる所を云はずして而て親子の愛情を寫せしは實に妙中の妙と云ふ可きなり其終りに至て其奥樣が病床に於て上帝に感謝を捧るの一段亦宗敎家が臨終の有樣をよく寫せり余は本篇を讀て人世の幸不幸は家の貴賤に關せず貧富に依らざる事をよく寫せしに感服す若彼の奥方が何處にも嫁する事なく終生愛子と共に暮したらんにはたとへ茅屋の裏に弊衣褞袍を纏ひ糟粕を食しても尚幸なりしならん愛する子と緣を斷て貴門に嫁せしとて金衣玉食何にかなる山海の珍味何かなる子爵の位は其悲を慰むるに足らず黄金は山程あるとも子にはかへがたし日本の如き女子の位置の低き社會に在ては斯る例少しとせざるべし再び云ふ人世の幸不幸は貴賤尊卑に依らずと、若小說が世敎人心に多少勸戒の功ありとせば願くは世上幾多の婦女子諸君が此小說を以て大に考ふる所あらん事を尚余が本篇を讀みて感ずる所は其着眼の高潔なる事あり本篇固より多少據る處ありしとは云へ斯る高潔の小說の世に出でたるを余は祝賀するものなり余は世の小說家が斯く理想を高尚ならしめん事を希望するものなり何は兎もあれ本篇は若松しづ子一二の著作中出色の文字にして近來の群小說に卓絶せる傑作と云ふも過言に非るべし。

若松しづとは確かに女性ですと女學子の仰せ、余も亦然らんと思へり近來日本の社會が進步せる證據にや續々女子の著作者が文壇に現はれ出るは實に賀すべきの至りなり殊に「蘆の一ふし」及本篇の如き立派なる著作をなさるゝに至るは更に喜こぶべき事と云ふ可し嗚呼我國文壇のパレツト、ブロニング、たりジーン、インゼロ―たるべき女子は果して誰ぞ。

新年第一の雜誌まだ少々あり升

磯の小貝

○理査士、格武電

「家の爲には身を忘れ、國家の爲には家を忘る」とは是格武電氏終生の本領にして氏が第十九世紀の大政治家として英國の政史に赫々たる光明を放つ所以なり其夫人嘗て氏に語て曰く御身已に多くの良き働きを爲し高き名與と地位を得玉ひしなれども若し御身と妾と婚せる後遠きカナダの林に行きて靜かに住みしならむには如何ばかり二人の爲めに宜しかりしならんと妾は時々思ひ侍るなり、

以て氏が國家の爲めに家をも忘れたるを見るべし然れども氏自ら云へるあり、

余が一生は實に懶惰なる一生にはあらざりき云々。

古來幾多の人間或は生れ或は死したるや殆んど數ふるに遑あらざるべし然れども其死する時に至り其一生涯を回顧して自ら其爲すべき所を全ふせりと滿足する所のもの果して幾許ありしか實に格氏の如きは稀世の人物と云ふ可し其他氏がヘーシヨットの孤村なる茅屋に生れてより千辛萬艱に或は遇ひ或は排して今世紀第一流の人物となるに至る迄感服すべきもの蓋し枚擧する能はず濁流混々たる政治世界に在て道德の標準に一點の戻る所なく、泥中の蓮の如く卓絕せるは蓋し世界開闢以來氏と其友武雷士あるのみ武雷士傳先に世に出で好評を博せり其記者の手に依て今亦格武電氏傳現はる、氏は實に世の政治家たらんと欲するものゝ學ぶべき人物なるを知らんと欲せば速に此格武電傳を讀むべし。

凡そ著書の中最も讀むに快樂あるは傳記なり是實に事實を有躰に叙述せざるべからざるが故に自ら文章に彩色を添ふる能はざるが故なり殊に傳記の譯書に至つては多くは乾燥淡白殆んど人をして讀むに堪へざらしむるもの比々皆然り然るに先の武雷士傳と此格武電傳に至つては則ち然らず卷を開けば亦之を蓋ふ能はざらしむ而て讀終て尙其短きを嘆ぜしむ彼世人の最も難しとする譯書の傳記を痛快爽絕の文字を以て叙述せる譯者の靈腕眞に驚くに堪たり出版月評武雷士傳を評して、

（前畧）百四十餘頁の一冊子を難なく讀了せしめ尙ほ再讀の念を發せしむる所以のものは其傳記の壯快にして且つ文章の巧妙なるに依らざるはなし要するに此書の如きは世道人心に關し最も必要有益なる大文字と稱するも誰か之を首肯せざるものあらんや、

と云へり此評實に至當と云ふべし而して此格武電傳を以て彼武雷士傳に比すれば其優る所果して幾等ぞや武雷士傳にして

尙彼好評あり本書格武雷傳の大文字たる今更喋々するを待たざるべし文章甚だ平易にして而て彩色あり流暢にして而も浮華に流れず決して他人の摸し能はざる獨特の妙あり亦本書の如きは只に傳記として讀誦すべきのみならず文學上の著作として大に價値あるものと云ふ可し全篇十七章二百二十餘頁一の指點すべき箇所なし殊に末段の二章の如きは妙絶の文字と云ふ可し余は斯る好著述の世に出でたるを喜ぶと共に世人が之を愛誦して格武雷氏の人物を慕ふに至らん事を希望する者なり彼武、格二氏が稀世の大偉人なる事は之を知る人多しと云へども之を慕ふの人物に至つては實に寥々たり之を慕ふべきもの何ぞ獨り民友子に限る可けんや余は世人が遍ねく斯の如くならん事を願ふなり。

雜録

○感動すべき美談　もみぢ

諺に長者の万燈、貧の一燈と云ふとが有り、聖經にも寡婦がレプタ二つの金を申して、富める人の千鈞万兩に優れりとして有り升す。　一躰、慈善寄捨なぞと云ふものは誠より發すべきもので、則はち其の誠の篤く大きくあるとを大切とするのであるから、與し之を現はす所ろの品物は小く少なしとするとも、若し誠だに切ならば之を何よりもと賞するわけで、昔の聖人が貧者寡婦の收め物を喜ばれて反つて富めるものの義捐を嫌はれたは此處の主旨にあるです。　然るに此の最と小さき收めものは、啻に其の中に含める誠の切あるのみにてはなく、尙ほ此の切なる小さき誠が實は大なる品物を寄附せしむるの基ひとなるから、實際の上に於ても同じく第一に重んずべきであるです、彼のレプタ二つ、微かなる一の燈は眞に最と小さきものである然し此の小さきものに凝れる眞實の誠が將來大ひなるもの丶種となつて、非常の慈善を起し來るので、即はち實益の爲めにも第一の功を奏するのです。

冷たい心を以て出した万兩は万兩丈けの價ひである、然し温かな誠より出でたる一錢は異日万兩万万兩をも出させるの勵ましとなります、即はち一錢の中に籠つたる眞實が既に美あるのみならず、更に幾千萬の益を起します。

左れば余には金なし、持物なしと云ひて盡力するとを怠たる人は、未だ眞實と云ふ心に莫大の力のあるとを御存じないのであり升す、金錢は人の誠を造りませんが、人の誠はよく幾万兩の金をも寄捨せしめます、尤も重んずべきは人の誠で、

誠さへあらば何物でも得られ、何事でも成就します。夫れで誠と云ふものは人々の心掛次第熱心次第で出て來るもので、何も金が無いゆへ持物が無ゆへ出せないと云ふものでないです、左れば何人でも善事業に大ひなる助けの出來ぬと云ふとはありません、只だ自ら爲ぬのであり升す。

先達ての下谷メソヂスト教會の廢娼演說には、血氣さかんな立派な青年學生が下足番をして一々聽衆の下駄を預かり、夫丈の入費を撿約して廢娼論の刷り物を刷つて廣く配ばられたです、其誠實には辨士も大に感奮して一層熱心に演說し、聽衆も非常に感動して續々廢娼贊成の事を申し出たです、其上もし此談を傳へ聞く人があらば何人も感心しましやう、其初はたゞ下駄を取ると云ふクリストの心から出たので、此の最も小さき所より大なる事を起します。

又青年同盟會の方々が勸告文を印刷し、此の寒むろらに毎朝吉原の廓そとに立ち、遊んで歸る人々に送られると云ふとは一層感動すべきとて、親の金を遣ひ學問に怠けて放蕩をする書生と、忙がしひ學問の餘暇に小遣を減らして忠告文を刷り之を配る青年と、抑も何んたる相違でしやう。

○雲峯子に　　美妙齋主人

はかない拙作の韻文を詳に御覽になつて剩こま〳〵との御說をさへ御加へ下さッた御信切感銘の至りです。御論は一々御尤、それだけまた私しの意見と多少相違する處も無くは有りません。が、今はしばらく扣へました。申すと何か鳴呼な言葉ながら韻文はもと〳〵私しが―明言しますが―小供の時からの好物、二三年來すこしは取調べた處もあり、かた〳〵それをば詳に書き記して近々に出す所存、其の時は今日批評を賜はッた御よしみ甲斐に折角御覽の上は示教も願ひます。又ついでに申しますが、半年程以前から私しが計畫して居たエピックは其實―御推量でも有りましたが―先日の醉沈香では有りません、近々に金港堂から出版するのが即ちそれで、平生の私しの韻文論もそれと同時に揃へて出すつもりです。それ故にそれだけは御含みを願ひます。まだ御目にも掛らず、御本名をさへ知らぬものが、究竟の畏友と見上げて預言をさへしました。一種の歌とも、詩ともつかぬものを出すからには保守からも急進からも攻擊は是非ある事。かれ是亂雜な其中に於て、天晴れ一句でも精の精評を賜はらば決して忘れぬ程忝く存じます。　敬具

○食前食後　社の小僧

三度の食事をなす時にいろ〳〵の心得があります、朝起きて直ぐに膳に付きましてもさのみ食物が味よくは思はれませんこれは一夜の間食物を受けずに居りました故胃の働が極く弱くなつて食氣が進まないのでこのやうな時はまづ庭でも掃除して十分の運動をなしそれから先づ新聞紙の一二枚も讀でから食事に付けば鰹節の少ない味噌汁でもそれは甘味しく戴けます、何故なれば今迄ぐず〳〵して居た胃は全く目がさめたやうに消化の勢を盛にして來ますからの事です、そして食事に御付きなさる前は成る可く身躰を靜かにして急激な血液の循環を起さないやうにせねばなりません唯だに身躰のみではありません腦の如きも同じく靜かにして氣をおち付て置かねばなりません、よく人が申します心配で〳〵御膳も喉へ通ませんとこれは最もな事です腦に深い刺擊を與へますと全身の血液も多く其部分へ集りまして胃の働き等はお留守になりますそれ故に山海の珍味も味がありません、しかしコンブと申す醫學博士は壯年の人々が朝早く起き出で賜ふ時は先づいそぎ食事に付かるゝがこは其人の健全なる證とするに足ると申されたりもし右の如き方ならんにはさのみ食前の運動も必要はありません、強き運動をなした後直ぐに食物を取れば胃の弱い人は吐いてしまい胃の強い人は吐かずともその食物は十分の消化をいたしませんがこれは食前の運動に限りません食後の運動も同樣です、前にも申せし如く血液の運行によりて胃の働は鈍くなりますそれ故に食前食後の運動は靜にかつ長きをよしとします、また食事の時は小量宛そろ〳〵とめしあがりませんといけません胃が一時に多量の食物をうくる時はそのつとめを十分に盡し消化を早くすることが出來ずそれのみか胃をいためることも度々ございますから。

○菓子改良論　仁田桂二郎

坪井氏の菓子改良論は大贊成なり日本の菓子は實に甘過ぎる故胃を害し溜飲を起し病人兒供には甚だ宜しからず吾が如き病人は極々菓子を好めども其の砂糖多きに閉口するなり可成砂糖を少くしアンを減じ麥類及モロコシ類を多く用られたしカステラの如きは滋養分は大分あれど矢張甘過ぎる故玉子入パン位の甘さに爲されたし玉子、乳、等を多く菓子に用ゆれば滋養を増して善きには相違なきも日本の如く貧人多く生活の度卑き所ろにては容易く此く改良することも叶はじ強て此くすれば貴族的の菓子となり少數人の便にのみなれど多數人は

其の益を棨らじされば格別製造費を増さずに出來る丈けの改良を行ふとを善しとす砂糖を減じたる代りに飴を加へ餡を少くしたる代りに穀物中の滋養品たる小麥大麥もろこしを用ひ尚ほ成るべくは玉子、乳等を混ぜば改良の一着あらん歟羊羹なぞは廢すべし餅菓子の皮には少し醱酵したる上にて焼ける者を用ひては何如にや小麥粉等を其の儘錬つて焼きたる者は宜しからじ。

○近作數首　湘坪女史

明治己丑年將㆑盡偶得㆓一絶㆒

食未㆓曾飢㆒衣未㆑寒。忙餘時得讀書閒。幸矣生計甚相適。常在㆓福神窮鬼間㆒。

一日席間卒賦

閒坐歡聲自帶㆑春。何妨喚來入㆓梅樽㆒。笑看後進滿㆓家室㆒。己不㆓屠蘇先飲㆑人。

泊小磯

如㆑墨狂雲如㆑雪潮。高樓孤客夜濟寥。山鄉松籟水鄉涙。到處何邊無㆓亂囂㆒。月落江天夜幾更。黑雲萬里壓㆑窓橫。經過風雨山中住。滿枕波濤夢不㆑驚。

○小供の美談　草の舍　一女枝

妾青天の春を迎へ或家に行しに此家に九歳程の少女有しが今外よりかへり父母に其歸宅をのべ而して後、己が室におもむきしが稍ありて又父の前に來り辭を温柔にして云へるやう、

少女　父上あなた烟草を召しあがらないやうにして下さいまし。

父　フヽン御前は先日は津田さんのあらわした酒の害を見て酒をやめろと云ひ又々烟草までとはそうはいかないよ」と云ば少女はねつしんに、

少女　なぜやめられません。

父　なぜでも御前どこに害が有かわからないから。

少女　さやうなら害がわかればおやめなさいますか。

父はたはむれに、

父　ソーサマヅ。

少女　やめますね。

と、如此約束せしが少女は烟管を持ち烟草をすい其烟管に紙をあて是にけむりをふきこみしに烟草のやに紙に耳かきに二つ程たまりしが父は是を見てギックリ胸をさゝるゝ程感じましたそれから早速烟草をやめました妾も側に見て居りまして

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

其少女が父を愛するを見且つれい利あるにも感心したゞちに家にかへり父母に談し少女の心ざしに賛成せんと思ひしに妾ハ不幸にして父母なし、しかれば幸に女學雜誌社へをくり四方の兄姉諸君に賛成をこふ。

田舍者のことゞ言葉にあらく〳〵しき事及びいたらぬ處ハよく〳〵御なをし被下度願上候

○よべの夢　美妙齋

さめて　よべの　ゆめを　思へば
はづかしき　事　かぎり　なし。
さめし　まは　しづめし　空想、
ゆめの　まは　あるゝ　妄念。
いでや　雲、　汝は　ゆめ　あきか、
雲は　たゞ　無心に　うごく。
さは　ゆめよ、　ゆめも　亦　ゆめ、
いき　たえて　また　夢路　なり。
夢の　夢　さとるは　賢者、
世の　ゆめを　知るは　聖人
いきたえし　ゆめを　知るもの
さて　何ぞ、　眞理　のみ　なり。

○父上今は何處に　梧邨居士

「幼なき乙女ひき連て。泣きむづかるを賺かしつゝ。斯る暑けき砂原を。そも御身等は如何なれば。歸るとはせで漂ふや。故ぞあるべし話しね」と。言ふに一人は顏もたげ。「身はロパートと名づけられ。又之れなるは妹の。ローズと呼ばれ侍るかし。吾等二人の同胞は。日毎濱邊に立ち出でゝ。入り來る船やあるべきと。黄昏時の鐘の聲。微かに響く頃までも。沖を眺めて彳みつ。我父上を待つになん。家に在りとて母上が。憂はしげの顏見ば。何なさんにも手につかず。二年前のとなりき。我父上は彼處なる。港を船出し給ひて。海原遠く立ち出でつ。幾日經てども歸り來ず。我儕も待てば母上も。軒端に夜毎燈し火を。掲げて若しも我父が。歸り來まさんとあらば。此の火を目途とし給まへと。それと言はねど心ろには。願ぎ居たりしも空賴め。待ちしも一日二日かは。夏もいつしか冬も亦。夢か現と見る間に。早や二年になりぬれど。門邊に父が足音の。音づるとはなかりけり。嗚呼父上は今は早や。黄泉の客となられしか。船出せし日は麗しく。裝ほひたりし彼船も。水泡と消て失せたるよ。あな痛はし」と言ひ終はり。涙はいとゞせぐり來て。兄を見上げし妹の。薔薇な

す顏に滴たりぬ。二人は頓がて立ち上がり。ローズ背負ひてロバートは涙なす眼を押し拭ひ。夕照紅り照らし來る。沖を眺めて悄然と。彼方を遠く見給ひね。西に東に飛ぶ帆影。あれや父上居ますらん。これにやおはすと見る間に。いつしか消えて跡もなく。往き交ふ舩は集まりて。又離れつゝ二ッ三ッ。はや日も暮れぬいざローズ。今日も空しく歸らんか。如何にありしと母上が。涙隱して問はれなば。其時何と答ふべき。問ふ人よりも問はるゝ身。胸も張り裂く思ひにて。母子三人が分ちなき。此哀しさを誰が知りて。誰が哀れとや思ふべき推し給へ」とかこちたる。喞ち言葉を打ち聞きつ。彼の色黒くむくつけき。頰鬚長く生ひ出でし。男は此方ふりかへり。「嗚呼ロバートかローズか」と。左も怪しげに叫びつゝ。やをら砂地に跪づき。二人の顏を見詰むれば。二人もそれと悟りてや。「こは父上か父上よ。何處に君は」と右左り。抱きつ縋りつ喜ばしさよ。聲も惜まず泣き叫び。年頃日頃結ぼれし。胸の思ひも今日此處に。昔し語りとなりつるよ。こは何とせん嬉れしやと。洪みに手をば取り交はし。頓がて着きぬる我宿の。羽生の小屋も何となく。そゞろ昔の忍ばれつ。二人の歸り待ち詫びて。軒頭に佇み居し母も。「こは我夫か」とばかりにて。外に育類も荒波の。寄する渚に世を送る。海夫が伏屋にくつろぎて。其夜は語り明かしけり。左れど其昔破れてし。船は濱邊にたゞよひて。烈風強く吹きつけつ。なるとはなしに曉きの。白み果てしぞ哀れなる。白み果てしぞ哀れなる。

○顏を洗ふ譯　　友輔軒

ウイルソンと申す醫師が顏を洗ふ事に付て申せし事あり、顏を洗ふに常りさま〴〵の方法ありそが中に過てる洗ひ方も少なからずいま余は多くの仕方ある中に唯一つこれぞ眞の顏を洗ふ法とも云ふべきものをしるすべし、先づ盤に新鮮なる水を七分目ほどみたせ息をこらして顏と手を水中に沈め全く濕ほふ頃(五セコンド程の間にてよろし)石鹸をまんべんなく顏へ塗り再び水中に顏をひたしよくこれを洗ひ去りまた〳〵新しき水にてよく面を洗ふなり、石鹸を用ゆる事多ければ皮膚のいたくキシミて何となく面の强張る事あり、こは石鹸の脂肪を十分に取り得ざりしことと石鹸の脂肪と附着して流れざるが故なりさる時は微温湯をもつて静かに皮膚をあたゝめしかるのち海綿などにて洗ふをよしとす、顏ほど外物よりの汚を受くる所はあらじ面は少なく

も日に三四回は必ず洗ふ可きあり、顔を洗ふには先づ左の三つを心得べし、第一は汚物の堆積を防ぐため、第二は皮膚の强壯と、第三は爽快にあるためにして度々顔を洗ふとてしやれものなりと云ふべからず。

○人の長所、短所　さし子

土佐の國昔し坂本龍馬氏あり氏は當時の英傑なりと聞きぬ或人氏が終始一回だも人の非事を說ざるを怪みたりしかば氏答て人の長所を稱すれば其短所は自ら知るべきなりと、離間讒謗急勢を得んとするの世に當て尤も氏が言の甘きを覺ふ。

○愛情論（其三）　しきたへ

世に戀せぬ人のあるや如何に、戀を知らぬ人は世の幸福を希はざるの人ありかし、彼の人と友たらば身の幸いかに深かるべき、彼の人に慕はれなば樂さいかに多かりなん、あど思へばこそ愛の爲にかたく繫がれて解く可きよすがもなきに至らん、さらば幸福ありて始て愛あるか、否、愛其物ぞ幸福なり、相ひ愛するの人互に語て云ふ深山幽谷の茅屋にあるも君と共に細谷川の流れ酌まば孤居金樓玉殿にまして嬉しかるべしと試みに思へ浮世の幸福は金殿玉樓にあつて弊家茅屋に非ず、焚桂烹珠の奢侈にあつて粗食無味の膳部に非ず、されば相愛者は何が故に松籟の響き溪流の音深き邃りを幸福なる處とするかこれ愛情の幸福あるが故なり、身邊の事物みな己れを苦しますると一度郎君が笑るを見ば其苦忽然として去り、萬般の繁業心靈を亂すの感あるも一度愛婦が歡迎をうくる時は意自ら爽快なりこれ幸福に非ずして何ぞ、眞の幸は愛のうちにあり然れば世に眞の幸福を味ひたる人は眞の愛情を知る人なり、眞の幸福を希ふ人は眞正の戀情を希ふの人なり、余は社會の人々がかゝる神聖の戀情をして戀てふ文字愛てふ語句を口にする時は忽ち不可思儀の臆斷を下し一種云ふべからざる不潔の考へを挿むを知る嗚呼愛戀の貴重すべき文字をかゝる賤劣の有樣に導きし者は其罪大なるかな、聖淸あるエルサレムの殿堂は兩替をなす者鳩を賣るものゝために汚されたり、熱心純潔のアブラハムが子孫は僞りの預言者よりして救を全ふし得ざりき、天惠の愛情は其愛情を貴ふべきの人によりて汚されたり彼等は唯だ肉情に付ける愛をのみ慕へり彼等は靈性の永遠に生く可きを知らずかへつて死すべきの肉を愛するの徒なり、彼は白蓮の香りあるを知らずかへつて汚泥中の根を美なりとせり、余は云ふ根を愛してまた花を愛せよ、肉躰を愛護してまた靈性を發達せしめよ。

小說

○イナック、アーデン物語　テニソン著　菜女譯

夫がそれと名指した日が來て、エニイは云れた通り望遠鏡を借りましたが、これも何の甲斐もない始末でした、或は眼鏡を眼に合せ得なかつた爲めか、又は眼がうるんで、手が震へた勢か、夫の姿をそれとも認める事が出來ませんかつた、そうしてイナックの方では甲版の上で頻りに手を振つてゐる中に時間も船も共に過去つてしまい升た。

エニイは白帆のさきが遥かに水涯に呑れてしまふ迄眺めて居りましたが終に泣ながら立去りました、して此時の離別を死別の如くに歎きいし升たものゝ進まぬ我意を矯ても夫の申置に從はふと致しました、併し元來商屋に育てられたのでなければ商方上てすい掛引も出來ず、增して虛言はつけず、掛直などすることも出來ぬ處から、商賣も自然繁盛しませんかつた、そうしてイナックに何と云れよふと懸念しながらも、困難で切迫した折は元直を欠いて商ひした事さへ一度ならずありましたが、それをまた苦にして、尚々氣も屈し、悲歎もありました、そうして待てども來ぬ音信をまちわびつゝ覺束かぬ暮らしに安からぬ日を送りました。

さて病身に生れた三番めの子は慈母の手におよぶ丈の介抱を受ながら尚だん／＼弱くなりまして、處用でエニイが留守勝な爲か、又は藥餌の手當の屆かぬ故か、或は藥禮の心配から醫師の診察を略いた勢か、何故か暫時わづらつてゐて、エニイがそれと氣の付かぬ間にはや、籠の鳥の俄かに逃れる如くに幼子の罪なき靈は飛び去つてしまい升た。

さて葬を濟ました其週のまだ終らぬ中に、イナックの出發後いまだ一度も足踏せぬフィリップがエニーの幸福を願ふ信實な心にそれまで疎遠に打過た事の咎られる様に思ひ「けふこそ尋ねて見よふ、幾らかの慰めになるかも知れぬ」とて、先一家の表坐敷を通り、中の仕切を二度三度音ない升たが開くものもないので、かまわず這つて見升た、内に坐つてゐたエニイは子供を葬つて間もない事故、愁歎の心重く、人と顔を合はするさへ厭は敷て、背向になつてさめ／＼と泣ました、そこでフィリップは立たまゝで口籠りながら「エニイさん、わしはおまへさんに賴む事が有て來ました」と云ました「わたしの樣な悲歎、不仕合な物にお賴とは」とエニイの餘に沈んだ答に少し氣後れがして、間のわるさと、慈悲心に交る懼われながらも、請れぬ坐に直てから云出ました「わしはこゝの御亭

主が氣に懸けてゐられたとを相談に來たのです、おまへさんがイナックさんを御亭主に見たてなすつたは實によく見たてなすつたとわしはいつも噂してゐるのだ、イヤなか／＼しつかりした人で、自分の心にこふしよふと思へば必ず推し通すといふ氣まへ、今度自分の身にとつては樂でもない船旅に御座つて、おまへさんたちに淋敷くらしをさせるといふも元はといへば子供たちに兩親に勝つた修業がさせて見度許り、決して見物ざんまいの遊びあるくのといふ譯じやない、サアそれが望みの門出とすると留守の間に折角の學問盛りが過てしまつたあとへ歸られゝばどの位殘念か知れぬわけ、また萬一死んでゐるとしても子供たちが馬の子か何かの樣に野放しになつてると知つたら口惜いに相違ない、さてそこでエミイさんおまへさんとわしは子供の內から知り合た友だち中だから、亭主は大事、子供は可愛、とおもひなすつたら、こゝでわしに世話をさせるがいやとはいわれまい、わしは金もあり、くらしもゆつたりしてゐるから何の遠慮も入らぬが、それともイナックさんが歸りなすつた上で、金をまどひ度ならそれでもよし、兎も角、あの二人の子供を學校へ遣らしては下さらぬか、お頼みといふはこゝです。

聞てエミイは顔をそむけたまゝで「わたしは餘り悲敷ので、心も取り亂してゐ升からあなたに顔を合すさへ恥敷くおもひ升、併しあなたがお出の時は悲しくつて泣たのが、今泣くのは御深切に感じての涙です、イナックはたしかに生てゐると心によく分つてゐ升から、キットお金丈でもお返し申す時節は來ませう、御恩許りは金錢とちがつておかへしすることは出來ぬほどです」「そんならわしの云ふ通りにさせてくれ升かと云れてエミイは始めて立上り、こちらを向て、涙の一杯溜つた眼でフィリップの飽まで深切な顔を見詰め、フィリップの手をシッカリ握ると其まゝ向へ這つてしまい升た、フィリップはそこでひと安心して歸りました。

それからフィリップは二人の子供を學校へ入れ、入用な書物を買つてやつたり、萬事自分の子供の樣に眞實身に染みて世話をし升た、併しエミイの爲を氣づかつて逢たさにはやる自分の心を矯めて、敷居をまたぐ事さへ稀でしたが子供たちにあづけては送り物を度々し升た、其送りものと云は野菜とか、菓物とか、壁にからまつてる其の時々のばらの花とか又は野兎とか、時には始終絶間なく音たてゝ、高く廻轉てゐる機械車の粉抔でしたが、粉をよこす時は、是は細かだから上と云て

慈悲と云ふ名のつかぬ様にし升た。併しフィリップにエニイの心持が少しも分らなかつたと云ふものはエニイがフィリップに出遇時は與に有難いとおもふ心も塞つては口籠つて禮一言云れなかつたからでした、が小供らにとつてはフィリップが此上もない好い人で、フィリップを見懸さへすればどの様に遠からでも走りよつて、嬉そうに迎へるフィリップに嬉そうに挨拶し升た、そうしてフィリップの家へ行つても、機械場へ行つても、二人はうち同然自由な事をしてゐて、悪い事につけ、好事につけ、面倒見て呉れるフィリップを煩わす様になり、抱ついたり、一處に遊んだりしておとつさん／＼と云つてゐ升た、此通りイナックが段々忘れらるゝと共にフィリップが氣に入れて來ました、そうしてイナックのおも影は小供らの記臆の中には朝ぼらけのおぼろな頃ろ、遥か彼方に見えた姿の段々幽に成て、果は消失せる様でした、そうこうする中、イナックが家と本國を跡に見て立去つてからいつの間にか十年の年月が飛び去つてしまい、イナックの便りとては未だに氣もありませんかつた。

寄書

○先づ廢妾より始めよ

依田雄甫

上毛の青年諸君一たび廢娼論を唱へしより東西至る處賛成者多く府縣會に演説台に其勢を聞かざるはなく將に全國を擧げて廢娼に一決せんとするの有様なりき廢娼論の勢力亦盛なりといふべし然るに新玉の年立ちかへる朝となりてはさしも盛なりし議論も舊年と共に何れへか過ぎ去りけん今は此論を唱ふる者とへ稀になりて娼家に遊ぶ者は依然たるが如し余は此論を唱ふる人の熱心ならざるを咎めず此論を聞く人の熱心ならざるを嘆息せずんばあらざるなり——我日本國の不消徳人を以て滿たされしを慨嘆せずんばあらざるなり。

娼妓の有害なるは何人といへども之を熟知するならん知て之を廢せざるは何ぞや只是れ一個の一薄弱なる一情實の存するに由るのみ嗚呼情實汝は吾人を驅てかゝる不幸の深淵に沈ましむる者なるか嗚呼。

然れども情實上直ちに娼妓を廢することは能はずと唱ふる者多くあらんには余は殘念ながら彼等に一歩を讓りて玆に他の一題を提出すべし廢妾即ち是れなり。

彼娼妓なる者が金錢に其身を束縛せられて人生いふに忍びざる醜業を行ひ且つ之が爲に幾多の人間を誹謗せしむることの甚しきは何人といへども之を知らざるものはなかるべし然れども見よ彼妾なるものを彼妾なるものは何如なる性質の者なるか娼と妾と其異なる處は果して何れの點ぞや余未だ容易に之を識別すること能はざるなり既に娼妓を以て不道徳なる者となさば妾も亦不消徳なる者となさゞるべからず娼妓を以て廢せざるべからざる者となさば妾も亦廢せざるべからざる者なり余は故に曰ふ妾を廢せざるべからずと。

一錢を得るも之を酒色に費やし十錢を得るも亦之を酒色に費やす彼無教育の子弟程憐むべき者はあらず今忽ち廢娼す之れ彼等を驅て更に他の甚しき災害に陷ゐるゝ者なり故に廢娼を急速にすべからずとは是れ存娼論者の口實にあらずや然れども余は廢妾に於てはかゝる心配を用ひざるなり試に見よ彼妾を蓄ふる人を彼等は中等以上の人にあらずや彼等の多くは相當の教育を受けし人にあらずや彼等は妻を有する人にあらずや彼等は子を有する人にあらずや彼等は家を有する人にあらずや彼等は財を有する人にあらずや彼無知の民卑身家なく往て遊里に遊ぶ是れ比較上猶ほ恕すべき處あれども彼妾を蓄ふる人に至ては決して恕すべからざる者なり今や家なく妻なく教育なき人の娼家に遊ぶを以て不義なりとするにあらずや然るを况んや家あり妻あり相當の教育ある人の妾を蓄ふに於てをや余は故にいふ妾を廢せざるべからずと。

妾の大害ある余は玆に之を喋々するを要せず試に何々騷動といへる舊譚を取て之を點檢せよ忠臣義士が氷なす白刃に其元を喪ない妻子眷屬が不幸の深淵に沈淪せし之を大にしては其國を亡ぼし之を小にしては其身を失ふ是れ一として妾より繰生せし禍害にあらざるはなし妾の害たる更に娼妓より甚しき者あり余は故に曰ふ妾を廢せざるべからずと。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

卿大夫一妻二妾、士一妻一妾とは是れ漢儒の許す處なれども其弊害極めて大なる者なり謊し數婦を以て一男に配すれば妻妾の間に嫉妬の心を生じて呑恨反目の騷に陷るに至るや必せり結婚の目的豈獸慾を縱にするが爲ならんや然るに今や造化の法則に背き一夫を以て數婦を娶る如此ならば決して幸福和合せる「ホーム」を成すこと能はざるなり余は故に曰ふ妾を廢せざるべからずと」男子五十氣猶剛、婦人三十色既衰是に於てか半白の老人を以て紅顔の少婦に伴ひ「ラムプ」頭を以て「ビードロ」を倒にせる如き婦人を得んと欲す故に青年の男兒を有する人にして二人の女子を妾とし懷春の女兒を有するにも拘らずして多情の侍婢を迎ふ是れ己れが子女の前に不義不徳の窩穽を設くるにあらずや然して其子女の品行方正ならんことを望む是れ決して行はるべき道理にあらず謐しかゝる「ラムプ」頭よりは決して赫々たる威光を放つこと能はざるなり故に一家を齊へんと欲する者は先づ其身を修めざるべからず余は故に曰ふ妾を廢せざるべからずと。

夫婦一體たるべしとば是れ聖書にいふ所にあらずや然るに若し一男を以て數婦を娶らば啻に不幸なる曠夫を生ずるのみならず造化の法則を破り上帝の意思に背く者といふべし余は故に曰ふ妾を廢せざるべからずと。

一男三婦を娶り各婦三子を産むと假定せよ此れ一父にして九子を養育せざるべからざるにあらずや之に反して三婦三夫に配して各三子を産まんか則ち三父各三子を養育せば則ち足るなり三父にして九子を養ふと一父にして九子を養ふとは其精粗論ぜずして知るべし而して此九子も亦社會を搆成する一分子にあらずや然らば則ち其善惡の社會上に及ぼす影響は決して少小なる者にあらず故に社會學上より論ずるも妾は之を廢せざるべからざる者なり余は故に曰ふ妾を廢せざるべからずと。

一夫にして數婦を娶るは啻に天然の道理に背くのみならず其結果上より論ずるも決して有益なる者にあらざるなり「ポリガミー」といへる醜花は何如なる果實を結ぶぞや夫婦の倫を破り家内に風波を生じ父子の親を害し嫡庶の爭を生じ貨財を失ひ嘲笑を招く等一として其結果にあらざるはなし故に蓄妾の風は斷然之を廢棄せざるべからざる者なり世の妾を蓄ふる者何ぞ斷然の處致を行はざる孔子曰く犬馬に至る迄皆養ふことあり敬せずんば何を以て別たんやと、事之と異なりといへども人として劣等なる情慾に制せられて高尙の志操を有すること能はずんば豈犬馬と異なる所あらんや。

○偶感六則

北豆學木生

才徳ある人は必ず謙遜なり

秋日川野に出でゝ五穀を見る穗大にして粒多きものは其實多し故に自ら穗を垂る之を眞穗と云穗小さく粃多きものは其實少し故に其穗直立す之を惡穗といふ學識深く才德高きものは謙遜なり之を君子といふ學識淺薄才德乏しきものは驕慢なり之を小人といふ女子の德は柔順を貴び謙遜を主とす今の女學生を見るに學問に誇り口達者に氣位高く生意氣なり悲哉。

妻君の良否は家の盛衰に關す

良人は外に出てゝ營々として働き妻君家にありて究々として理む良人の職は生產にあり妻君の務は消費なり生產は限りありて消費は極りなし世間產を破り家を亡ぼし生涯貧苦に呻吟するもの大抵妻君の家事に不取締ならざるはなし諺に曰妻君の不經濟なるは六十年の不作と又曰良人が桶にて汲込は妻君が匙にて汲出すに及ばずと妻君は經濟家たらざるべからず。

酒と女

酒客曰く女の酌なら酒が甘しと下戸も曰くお酌女が良ければ酒も飮めると故に酒席には必ず婦人を要す紳士の宴會に興を助くるものは紅裙の校書なり書生の宴席には割烹店の下婢あり良人の晩酌には妻君あり酒有れど女なければ興なく女あれども酒なければ愉快なしと醉枕跪猊美人膝酒と女は車の双輪鳥の兩翼多く飮ませ強く醉はせ狂ふて歌はせ踊らせ夫で始めてお酌が上手と人も讃め自分も誇る噫男子をして酒に耽せしむるものは獨り酒のみにあらず須らく酒を廢せんと欲せば女子の風を改めざるべからず。

子供は母親の鏡

予は數年兒童の教育に從事せしが兒童稍能く母親の氣質を顯はすものはなし詞遣に優しくて大人なしく何となく可愛らしき子供あり其母親を聞けば必ず禮儀正しく温靜なり言語野卑にして騷々敷亂暴にして不作法なる生徒あり其母親を聞けば果して禮儀作法も知らぬ無教育の人なり顏貌小奇麗にして何となく小賢しき生徒あり之果して清潔を好み甲裴〳〵しくチヤントしたる母親の子なり手足顏面イツモ汚れ衣服は垢浸みて惡臭を發し毛髮は散亂して虱の巢窟をなしドコヤラ不潔なる生徒は必ず不淨なる母親の子なり身成り不仕駄良にして破綻はイツモ切れ着物の縞柄は不揃股引足袋も穿かず帶は繩の如き襷にて胸は半顯はれ羽織狆犬も着せず寒中アル〳〵傷へ居る生徒あり果して意氣地なき母親の子なり其他生徒の擧動を見れば其母親の氣質はアリ〳〵と能く察知することを得るなり元來兒童六七歲若くは十歲頃迄は母親の膝下にありて斷えず其擧動を見習ひ知らず感化せらるゝものなり而して一旦感化を受くる時は先入主となり容易に脱することを得ざるのみか折角の學校教育も家庭に居る時間多き故所謂一日溫めて三日冷すと一般にても益する處なきなり學校にて教師が修身談をなし言語を正すも家に歸り母親が姑舅のワルサを云ひ他人を誹譏し罵詈惡口をなして子供を叱り衛生談をなすも母親がお引尻不淨の持前にてあり理化學を教ふれば妖物詐燈籠の咄に妄誕無稽の教をなし教師がイクラ熱心に教ふるも家に歸りては直に打破られ昨日の說法水泡に歸することを毎度我々の歎息する處にてあるなり世の母親達最愛の玉兒を教育せんと欲せば我身を謹むべし。

上の好む所下之より甚し

娼妓は氏なくして玉の輿に乘る某縣の次官は交際の機關と持囃され鐵道王の縣視會には招待を受けて盛宴に陪し御目にとまれば高貴の別莊に手活の花と眺められ榮轉しては貴顯の內君と化す娼妓は之女子の登龍門なりと淫婦は之を慕ひ父母も之を尊ぶ嗚上の好む處下之より甚し上流清まずんば爭ぞ下流の濁を除くを得ん悲哉。

娼妓家に入れば家必ず倒る

青樓簾が明るくなればうちの身上が暗くなると青樓に流連し娼妓に溺るゝ時は家に叛ろし妻君のあたり父母の御前もよろしからず遂に一家の風波を起し妻は離緣親は隱居親戚朋友交際を絕ち思ふ娼妓を身受して僅か一年か三年にて親の遺産を棒にふり始めて眼が覺むるに至るなり予世間の席を破るものを見るに十に八九は娼妓の爲なり而して破產家の妻君は大抵娼妓上りなり。

開書

○熱淚以て淸淨なる都人士に訴ふ　大和郡之助

吾人は今や熱淚を奮ふて純潔なる都人士諸君に訴へざる可からざる運に際會せり余は先きに一書を裁して女學雜誌に送れり云はく（第百九十五號）……茫々たる腦髓を中は學科に苦しめ漸く下宿屋に歸り來り候へば元氣の何物たる戀愛の何物たるを知らざる學生猥淫言耳を汚し心を亂し泥中に座するが如き心地せしむ云々、

あゝ醜汚なる空氣は吾人を圍繞せり吾人が精神を卑劣にし怠惰にし柔弱にし不活潑にしつゝあるなり此れ獨り吾人の境遇のみならず府下幾千の下宿屋殆んど然るあり余は禁酒店の案內を乞ひしも是に因するなり女學雜誌記者敎示して云はく、禁酒の道が開けませんから禁酒旅店のようなものも東京にはありません（中畧）但し前號に廣告にあつた通り……赤心寮と云ふ禁酒下宿があります。

之を讀み失望せしもの落膽せしもの獨り余のみならんや荀も義俠に富み愛情に富み玉ふ讀者は吾人と感を同ふせしならん設令余一人は記者の敎の如くするも府下幾万の青年中淸淨潔白の君子余のみに非ざるなり此報は吾人と同じく泥海に座するならん況んや後來彼の學不成難死不歸てふを歌つて都城に出づる無垢無汚の少年をして朱に交れば紅くなる的にて不知不識元氣を失ひ遂に輕薄子となり前途を誤るもの多きは既に明なるに於ておや是れ吾人が此文を草し淸淨なる都人士に訴ふる所以なり。

吾人は信ず吾人基督敎徒たるものは至愛至情を以て忍耐と勉强と勇氣を以て浮華社會に飛出し烈しき戰の戰を試みざる可からざるを而れども悲哉吾人が前陣の如き汚穢なる境遇は吾人をして此等の美德を涵養する能はざらしめつゝあるなり亦吾人は信ず吾人青年がホームに於ける境遇の如何は將來國家の運命に關するを若し青年のホームなる下宿屋にして和樂なき乎德義なき乎元氣なき乎知る可し將來の日本！

聞く歐洲の如き婦人自から淸淨なる下宿屋を設立し幾多の青年をして勉學の餘暇には或は音樂を聞かしめ或は共に聖書を讀み爲めに有爲男子の心胸をして海濶たらしむと吾人未だ都情を知らず亦我淑女社會の如何を知らず而れども風かに聞く淑女社會中有爲の人少なからず堂々粹美なる文韋を取る人あり滔々懸河の辨を奮ふ人ありと果して然らば何ぞ吾人の爲めに榮譽なる（碌々無爲の人は如何に評するも）此職に就かざる何ぞ吾人が所謂下宿屋を設立せざる願はくは義俠なる我姊人諸姊よ乞ふ此擧に當られんとを余が有爲青年の代表者として熱淚を奮ふて哀訴する所なりあゝ義俠なる諸姊よ吾人が求めに與へよ若し夫れ一步を讓りて我國情實なるものは習慣なるものは未だ婦人をして此の如き業に當る能はざるものとせよ吾人は今生青年の朋友なり青年の保護者なりと主唱する（文韋上口頭上）先覺諸士に向て此擧あらんとを勸告せざる可らず否請願せざる可らず○○百の論說も一の實行に及ばず先覺諸士青年を愛せんとすれば今日府下の一大急務なる下宿屋（吾人希望する所の）を設立し吾人が境遇を淸爽にし吾人をして優美の感情を養生せしめよ。

○女學先生及び他の方々に報ず　岡山　岸田不奥

謹而新年賀新禧候先きの日種々御尋ね申上一々御示し下され有難く存候扨愛姊樣事十二月上旬より流行病に罹り御歸鄕御養生遊され候得共何分大病にて時物を介する能ざる程なれば其儘に打ち過ぎ愛姊の御全快を祈り居候處同月廿五日逝に訃を聞きて只茫然流涕す嗚呼此良友をして永く黃泉の枝に入恐せしむ縱りと雖も恍乎として姿影目に在り共に呼べども答へず地に呼べども出でず噫哀ひ哉愚妹を殘てゝ逝けり愚妹誰とか手を携へ語を交へんや悲哀嗚咽次々至る初め愛姊の我伯父母樣の家に寓し給や坐すれば則ち几を聯ね臥すれば衾を同す愚妹愛姊の命に逆ふも慈愛却て至る愚妹をして此德に報ゆる及ばざらしむ今にして之を想へば血淚泫然たり然れども流涕するも及ぶなし生あれば斯に死あり合あれば斯に離あり今また何ぞ悲まん唯是より後は愚妹の爲め遺し給ひし命を奉じ誓て忍耐勉勵し千辛萬苦我身に蝟集すと雖も敢て哀まず力の限り冒險進む可し卅最大なる不幸に依り先の事も無益になりたれば早々御知せ致さんと思ひ居しも眼病の爲め執筆の自由を得ず斯くえんにん致し候左樣御心得御許し下され度願上候愚妹百拜

○古今小說十種

何人が讀でも面白いと思ふ小說（古今）十種ばかり御知らせを乞ふ（T8生）

●北豆學水生　退化云々の反譯者とは石川千代松氏の動物退化論の事でしやう丸善で賣捌きます。アルノルド氏の亞細亞の光（反譯）は西京の反省會雜誌社へ注文されたら宜しひでしやう。ユニテリアン敎とは新敎中の異說者の總稱のやうなも

ので其仲間にも色々の分ちがあるです然し要するに基督を神子さしない流で宗教さしては決して左程進んたものではないさ思ひ升。鈴木氏の百人一首講義は合本にして近日出版いたし大抵三十錢にて賣捌ます。

●ワキガの答　女學雜誌第百九十五號究詢の部無名孃ワキガ止の藥は左の品が宜しひさ存じます、即ちザリチール酸半オンス、假製硫酸礬土加里即ち枯礬一オンス、右混和外用、腋の下を好く洗ひ少量をなすり付れば一日間は大丈夫止ります(T8生)

●水谷沙明逃主人　何如にも洋行は面白くありません我國の今日は最早海外に留學するの時代でなく海外に巡廻征遊するの時代です、彼の洋語も出來ずに洋行する愚かな人は言ふまでもなく小說を讀まず新聞も讀まず他に多くある外國の景勢の明らかに知れる書物も讀まないで卒然洋行する人は實に時も金も勞力も惜まない人さ云ふて宜しひさ思い升、此如き洋行の効能が無いさ云ふとか段々に分つて來たりし故か近來非洋行論などゝ云ふも現れて來まして多年私供の言ふたとが少しは先見の榮を得ます、前年友人で書物も多く讀み外國人とも極めて深く交際し外國の事情は隨分知り拔いたものが洋行しましたが夫れでも歸朝后洋行は損で夫よりも其入費丈の書物を買て見た方が善いさ云ふて居ります他は推して知るべしです特にアナタの御志の法學硏究などは十分に當地で出來るとです、十分に硏究なさつた上で彼の英國の學生が卒業后大陸旅行をする樣に暫らくの間だ巡廻なさつたら宜しいかさ思ひ升。

●メンスの虫　何故さ云ふ理由は知りませんが菖浦の青葉を乾かして之を其中に少々入れ置けば虫はむ事を能く防ぎます(德島一女生)。

●大坂組合教會一信徒　別に監督教會は總べて葡萄酒を用ひ組合教會は總て葡萄汁を用ゆるさも思はれません然し何處の教會でも晩餐式のは成べく葡萄汁に致したいです。督士亞曆などは督士亞丈に行れる丹で同國の日取は大抵日本よりも二週間ほど後れます、日本や西洋で正月なして督士亞に行くさ又々正月に出會ひます、夫で西洋で賣殘りの正月の品物を督士亞に持て行て賣るさ云ふとが有ます。

●下毛花の屋　高等商業學校への準備は富士見町に在る商業素修學校さ云ふが宜しひです。

●コンデンスミルク　に水の混ぜ方につき前號にも答へたですが少し間違ひました、先づ水廿四倍より十八倍位をまぜて段々に水の割方を少くするが宜しひさ聞きます。

通信問答

越后高田靑山樂子樣への答、

男子にても通信女學を勝讀されて差支へありません、又た試驗も施します、試驗は通信の上で致すのでありますす。

時事

○雪皚々

一望皚々、天地悉とく白衣を着す、然れども仔細に吟味し來れば片々皆な異樣に結晶す、(開卷第一葉圖解)、嗚呼人間亦た如此し。

○北海離宮

日輪南至すれば南方温たかに、日輪北至すれば北方温たかなり、帝の離宮之より北海道に造營せらると云ふ、北海の民亦た光に近づき、彼の滅絶せんとするアイノも亦いよ／＼王德に潤ふに至らん。

○英國女王陛下、婦人白標俱樂部

曩に條約改正の問題に關し、婦人白標俱樂部の佐々城豐壽、潮田千世兩夫人より英國女皇陛下に贈呈したる書狀に對し、過日秘書官ポンソンビー氏より答書あり彼の書は國務に關するものあれば國務大臣へ廻はし追て同大臣より通答すべしと申越したる由。

○五丈原頭の孔明

吾曹氏曰く、伊藤伯は燒芋、山田伯はラッキヤウ、松方伯は素麵、山縣伯は紫蘇の實、井上伯は麥飯と數の子、黑田伯は

鰯、西郷伯は猪肉、岩村大臣は鯡の蒲焼、榎本子は昆布巻、青木子はラーゲル麥酒、後藤大臣は附焼團子を好むと、見渡す所ろ諸君の食物甚はだ宜しからず、頗ぶる消化あしく滋養足らざるもの多し、特に酒を嗜まるゝなどは以ての外の儀なり、婦人衛生會、婦人禁酒會等の姉妹は、十分に勸告ありたきものなり。

○日本人増殖の策

僧侶にて國會議員の被撰權を剝奪されたるを遺憾とし、昨年來上願するもの續々絶えず、其願書に調印したる僧徒の數左の如しと云ふ。

新潟縣	六百四十五人	岐阜縣	百八十人	石川縣	七十二人
大坂府	六百人	福井縣	百七十人	和歌山縣	七十人
熊本縣	三百七十人	長崎縣	百五十人	神奈川縣	七十人
福岡縣	三百十人	奈良縣	百五十人	徳島縣	五十人
廣島縣	三百五人	長野縣	百五十人	京都府	四十人
三重縣	二百六十人	滋賀縣	百三十人	千葉縣	三十人
大分縣	二百四十二人	佐賀縣	百三十人	山口縣	二十五人
兵庫縣	二百十九人	香川縣	九十人		

合して凡そ四千五百人あり、諸君もし左樣に被撰權を欲せば何すれぞ還俗せざる、出世の身分にて議員たらんとするは官員の資格で居り乍ら撰擧されんとすると一對の事なり。

○武藏野

國民新聞發刊の祝ひ過る日三緑亭に開かる、才子雲の如く集まり小說談頗ぶる盛んなりき、餘興として法師某薩摩琵琶を彈じ枯姿慨然として大ひに歌ひけらく、

武藏野に草は品々多けれど摘菜にすれば扨ても少なし、皆な人は若き時より只徒らに日を送り才智藝能なき人は寶の山に入りながら空しく歸る如くなり…………

嗚呼實に然り、宇宙万象は吾等を圍み吾に靈能を伸せよと教ゆ、而して優々慢怠細技に流れて人生の責任を知らず、偶たま此世の人間に生れ來て眞如の玉を磨かずば人と生れし甲斐もなし、

餘勢万丈、聽衆たゞ暗歎するのみ。

○矢野龍溪君

聞く、君は晩近の小說家が滔々として魔界に墜落せるを慨歎し、親ら筆を取て新小說一長篇を結構せりと、思ふに近來報知新聞紙上に續々掲載する報知異聞即はち之れか、吾人既に其數回を讀むに、佐倉氏はエパミノンダスの如く、立花氏はメルロウに似たり、結構極めて壯大なる如けれど願くは人情特に至高の人情を寫すと亦切なるに至らんを預禱す、而て其

世を動かすと亦た君が前著の如くならんを熱望す。

○看護婦

大隈伯夫人は左の文に金五百圓を添へて慈恵醫院に送られたり、伯が重傷の際身傷づつける如くに感じて晝夜傍らに看護せられたる夫人には特に一層看護婦の信切なる助けを喜ばしく感ぜられたるなるべし、

啓者重信儀向きに不慮の難に罹り殆んど起つ能はざるの大患に嬰り特に慈恵醫院の看護婦を請ふて扶掖を托したるに其事を執る周到綿密其務に從ふ細心誠意能く醫家の旨を承けて着々機を誤らず病者の意を迎へて整なきに聞き形無きに見一動一作看護婦たるの實を見さゞるなきは數十日の久しき妾が日夜傍らに在りて實見する所なり顧ふに貴院々長始め諸國手の平素薫陶養成の致す所にして亦以て柔婉の女德を表するに足れり今や重信の大患漸く平癒の効を見るに至りしは此看護婦實に與りて力あるを知るなり聞く歐米諸邦にては良家の女兒慈悲の一心より自ら奮て病院の看護婦となり世人亦財を擲つて其擧を贊する者多しと眞に欣羨に堪へざるなり貴院夙に看護婦の養成に注意し其世を益する極めて大なるも人或は之を知らざるなきにあらず妾の家已に之を用ひて而して深く其實を知る今や貴院益其規模を擴張し其慈惠の澤に浴する者の愈々大ならんとを求むるを聞く妾其德を思ふて感謝に堪へず玆に金五百圓を寄附し以て其隆盛の域に歩を進むる費用の萬分一を補はんとす幸に鄙意を諒して受納あらんとを希望す

明治廿三年一月十三日　　大隈綾子

東京慈惠醫院長高木兼寛殿

○廢妾論、廢藝妓論

廢娼論と共に廢妾論、廢藝妓論等起り來れり、然れども妾と云ふものは現にあるとなし、藝妓が醜跡を爲すとに付ては法律の許す所にあらず、只だそれ隱に密行するものに至りては社會矯風の徒專ら盡力して之を防ぐの外ある可らず而して之を防ぐの最要務は社會の風儀を嚴肅にするにありと、社會の風儀を嚴肅にせんとせば先づ姦淫公許の法律を打滅するより初めざる可らず、故に密妾を廢し藝妓の私淫を防ぐにも先づ廢娼論に着手するを以て第一となす也。

○藝妓知事の名代たり

奈良縣の有志者は稅所舊知事を送るの別宴に於て、知事在わさずとて其の愛顧せしとか云ふ藝妓若駒を名代たらしめ強て上座に推進めて別辭を述べたる由、而して知事の之に憤ふれるを聞かず、又報ずるもの之を歎じて傳ゆるを聞かず。

○菓子

東京の菓子屋中尤も繁昌するは榮太樓と風月堂なり、昨年七月より十二月迄の賣高を聞くに、榮太樓は一万五千八百三十圓十二錢四厘、風月堂は九千八百七十二圓九十八錢六厘。

○加藤博士の進化論

加藤博士の進化論に至ては吾人殆んど忖度に苦しむ、君云く社會に發生せる万般の現象は何れも已を得ざるの理由ありて起りしものにして決して偶然に生せしものに非ざれば縱令ひ其現象は不良なるも不善なるも夫れ相應の必要あるものも少

からざれば忽ち之を刈除せんとは隨分容易なることにあらずと、此の論理によれば藝妓の世に在るも夫れ相應の必要あるものなればたとひ其現象は不善なるとも忽ち刈除すべからざるの筈なり、然るに君は之れを以て已を得るの不良物とし娼妓を以て已を得ざるの不良物として區別したり、吾人固より藝妓と娼妓との間に大差別あるを知る、然れども加藤氏平生の進化論によりて之を推定するときは果して何によりて二者の間に其の區別を明劃するを得る乎、世に需要せられて存するは已を得ず存するものなり已を得ずして存するものは即ち冷々進化論に對しては所云る善なるものにあらずや、亦た何んぞ已を得ざるものにして不良なるものあり、已を得るものにして不善ならざるものあらんや、加藤氏は玆に至つて優勝劣敗の上に更に善惡の理法なるもの丶存することを承認せざる可らず。

君亦云く、娼妓を廢すれば一層大なる不良物即ち和姦、密賣淫、若くは強姦等の風俗を增長すべしと。抑も君は何によりて和姦密賣淫等の姦淫公許よりも不良なることを證する乎、和姦密賣淫は賂賄私行の如し、君は賄賂の私しに行れんことを恐れて寧ろ之を公許すべしと云ふ乎、特に公許娼妓を廢せば強姦大に行るべしと畏懼するが如きは、譬へば賄賂を禁ずれば强盜隆んならんことを恐るゝに似たり、假令ひ强盜起ると云へども吾人は之が爲に賄賂を公許すること能はず。

吾人は固より藝妓改良論に同意す、然ども藝妓を改良し、密賣淫を取締るの類は惣べて廢娼論の第二着手事業たり、吾人が第一に打ち破らざる可らざる者は即ち姦淫の公許是也、姦婬の公許先づ除れずんば百の矯風事業決して成就することなし。

○一夫一婦の制言ふべくして行ふ可らず

如此く題して明治之輿論は激論し、各國の人口統計表を掲げて女子の大率ね男子よりも多數なることに根據し、一夫一婦は自然に於て許し難きの天理ありとせり、記者其他の理由を言はず故に吾人も亦た只だ此の一點より答ふべし、

各國の人口表を精覽せば惣じて少きとき老へるときには女子多けれども壯年即ち婚期嫁期に於ては男女殆んど同數なるを見ん、故に總人口表を一括して比較するは宜しからず。

好し女子の數多かりしとするも若只だ數の上より立論するとせば女子の數二倍若くは三倍せざる以上は男子が二三の妾を持ち得べきの理なし例ひ女子に端數の增加ありとも某の男子が其端數丈けを特に多く娶り得ると云へるの論法なし

況んや男女殆んど同數なるをや……況んや一夫一婦の事は如此き人數などの上よりのみ論ずべきにあらざるをや。

愚答右の如し。

○廢娼記事

京濱　去る十九日嚶鳴社討論會に於て廢娼討論あり島田三郎氏尤も熱心に賛成し角田眞平氏尤も熱心に反對せり○去廿三日夜は東京專門學校に於て巖本善治廢娼の事を演述す○去廿四日夜は本所龜澤町本所教會にて巖本及前川太郎氏演述す○今廿五日夜は番町教會に於て古莊、巖本共に演述す○今日午后三時より明治女學校に於て廢娼同盟會の協議會あり。

防長　防長二州の有志者發起し廢娼同盟會を起せり。

磐城　平の青年會は目下廢娼事業に運動することを決す。

名古屋　客歲廢娼論の一度諸方に勃興するや愛知縣名古屋に於ても有志の徒は廢娼會なる者を組織し種々盡力せられし處該有志中には隨分放蕩無賴の遊冶生も雷同し居るやの風評にて往々他の非難攻擊をも蒙りしやに聞及びしが此度當地の基督信徒中鈴木具子淸水米子古川澤子服部邦子等の數婦人には近日通常縣會も開會になることゝ故此際に乘じ着實溫厚に廢娼の運動をなし併て腐敗せる名古屋の女德を挽回するの事業に從ふべしとの議を以て各教會の姉妹方に相談せられし處皆々共働賛成を表せられし由にて右四婦人等目下準備に奔走盡力中なり(雪迺舍主人)

大和　大和に廢娼會を設け規約七條を定む同會よりの報告左の如し、

奈良　全國輿論は今や娼妓を邦外に驅逐せんとするの今日昨年末縣下我が五條に新に娼樓を設置せんと願出たる好奇者あり五條聖公會員柏田久太郎氏は之を聞き一篇の廢娼論を大和日報に寄せたるより反對論者の駁擊を求め甲難乙駁大和全國の一問題となり仝教會員櫻井德太郎鍵井淸造の二氏も熱心に盡力せられ郡長に書記官に常置委員に各々其の害毒たることを陳情し一篇の建白書を柏田久太郎外卅人より知事に捧呈したりしが當地の設置論者も百數十名の調印を以て設置の建白をなし且つ密かに計るに存娼論及び設置論は通常議論を以て戰ふ時は必ず敗を取るべければ非設置の主唱者二三人は腕力を以て抵抗し口を閉ぢしめんとせしに廢娼論者は屈するなく益々力を盡したるに遂に客年十二月廿八日附を以て(難聞屆)の三字を達せられたり而して大和全國青年の有志は進んで縣下奈良郡山にある三遊廓を全廢せんと欲し去る一月三日縣下高田町に有志の會合を開き別紙の如く大和廢娼會なる者を組織し仝日午后六時より仝町に大和全國有志聯合廢娼第一演舌會を開きたり辨士演題は娼妓の由來(中川吉藏)所感を述ふ(福田熊二郎)火の用心(山田重太郎)廢娼論(養渡春齋)存娼論を駁す(柏田久太郎)娼妓は國家の進步を妨ぐ(鍵井淸造)の六氏にて聽衆五百人餘大に感を與へたり右廢娼會部會は目下奈良田原本五條高田松山に設置し各部より知事縣會議長議員に建白書を呈し陳情委員を出縣せしむると議員各戸に就き遊說することに決議し建白書は二月下旬通常縣會開設の時捧呈することゝなりたり　P. K.

妓樓困す　昨年末以來東京各曲輪に對する貸金頻に減じ金主は反つて返金を促すと頻りなり、吉原の大文字樓も賣物に出で又角尾張樓も二万圓にて、品川樓も三万圓にて賣却若くは抵當借用せんと望み居る由。

新誌

○鐵道財產

曩に民情一新の爲に鐵道布設を主張したる三田翁は、今亦た私有財產の爲に鐵道株の買入を獎勵せり、實に薄利不便なる地面を持つよりか鐵道株を所有するは何程の益あるや分らぬ程ありり、田家村鄕の老輩少しく時勢に鑑みる所ろあるべし。

○藝妓改良策

讀賣新聞は藝妓改良策を講じて、之に鑑札を與ふる前に代言人の如く試驗すべし、音樂取調所あたりに於て之を試驗すべしと云へり、藝妓は素と鳴物を聞かする爲に需要せらるゝにあられば、如此き試驗法を行ひて好し及第者は續々製出するとも他の交際上需要に應ぜんとするもの更に別に現出し遂に改良の効ある可らず、藝妓改良の法唯二あるのみ、一は交際の席に婦人同伴の習はせを造ると、二は公娼を廢して密賣淫を制するを一層に嚴にすると、是れ也。

○朝野新聞

尾崎學堂氏歸朝してより朝野新聞快色を帶び來れり、直ちに目に着くは社說の慷慨にして文章の直截銳簡となれるとなり、而して朝には諸大臣より野には大臣氣取の人に至り、大は万國を睥睨する國躰論より小は湯屋燕尾服の論に至る迄で一々社說欄內に入れり、特に文章論も見えて甚だしく簡潔と云ふとを主張せられたる極めてよし、兎角近來は新聞將が單調子に流るゝ所ゆへ、朝野新聞輓近の有樣は大に目を悅ばすにたる、但し新聞は輿論を代言するものなれば、成るべく政治の事計りを言わぬようにせられたし、目下政治以外に論辨すべきもの極めて多し。

○惜むべき廢刊

文は今月より政治雜誌に化し、時務評論は國民新聞に合するとゝなれり、其の一變したるものは或は齊に近づきしならん、然れども彼の爽利多情なる評論及び博聞重厚なる文は最早再び見るあたわず、之を殘念の事とす。

女報

○東京唱歌專門學校　は創立以來漸次盛大に赴きたるに付き今回更に東京音樂學校卒業生宮崎、宇野の二女史を增聘したりと。

○看病婦養成　日本赤十字社婦人看護會にては看護養成の件と修業生使用方等のとに付き本日協議會を開きたる由。

○內外人の結婚數　神奈川縣廳に於て昨二十二年度內外人結婚數を取調へられしに英、葡、瑞、西四國人へ各一名淸國人へ四名米國人へ二名合せて十名なりしと云ふ。

○女紅場始業式　京都祇園新地甲部女紅場は去る十六日始業式を執行せられしが昨年中勉强せしものへ紅白の眞綿又は扇子等を與へたる由。

○婦人慈善會　京都婦人慈善會は去る十八日より高等女學校に於て開會し餘興には盲啞院生徒をして雅曲を奏せしめたりと云ふ。

○高等女學校　京都高等女學校教場寄宿舍の增築費は有志者の寄附金を以て充る筈にて先頃より其募集に盡力中なりしが其金額千八百五拾餘圓に達したれば教場と唱歌室とは建築し得べき餘裕を生じたるに因り近々工事に着手せしむる由。

週報

○訓令　十五日法律第二號を以て軍港要港に關する件を裁可公布せらる●十八日勅令第四號を以て出納官吏身元保證金の件を裁可公布せらる●二十日法律第三號を以て地方稅經濟に於て非常災害の爲めに要する土木費借入の件を裁可公布せらる同日勅令第五號にて裁判所位置及管轄區畫表中改正の件を裁可公布せらる

○宮庭　十四日天皇陛下內閣へ臨御●十七日天皇陛下は內閣へ臨御あらせらる●十八日宮中に於て歌御會始を行はせらる●掌典岩倉具綱氏は去る廿日孝明天皇御例祭神宮祈年祭の勅使として參向仰付らる

○政治　十四日各大臣は內閣會議に參集せり●元老院は去る十三日より開院せり●十五日山縣內務大臣は歐洲より歸朝后初めて出省せり●十七日總理大臣を始め各大臣は內閣に參集したり●十六日農商務局長前田正名氏農商務次官に任せらる●二十日自由黨の諸士江東中村樓に會して盛大なる結黨式をなせり

○外交　十四日葡國內閣辭職せり●十六日葡國新內閣を組織せり●十八日各國公使露國公使館に會合し外交上の協議を爲せり●十八日伊國皇弟アオスタ公爵薨す

○文學　十六日帝國大學法文兩科第十番教室に於て史學會を開かる●十七日鳩山和夫氏は東京能辨學會の會長となれり●國の榮の編者杉原謙氏は去る十五日發行の國の榮を天皇陛下、皇太后陛下、皇后陛下、皇太子殿下へ各一部づゝ獻納せり

○會社　十三日横濱株式取引所定式總會を開かる同日東京、日本兩電燈會社は合併を府廳へ出願せり●大坂堂島米商會所は去る十五日株主定式總會を開けり●十七日全國通運會社は社務擴張の協議を爲したり●日本鉄道會社は去る十八日株主臨時總會を開き日光鉄道延長の件を議せり●東京馬車鉄道會社は去る十九日株主總會を開き二十二年度下半季の報告を爲せり

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

東洋英和女學校廣告欄

廣告

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に渉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員孰れも熟達善良あり然して本校の教授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希望する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地　**東洋英和女學校**

今年は何年だ廿三年いかなる寐坊も脇腹に國會といふ活を入れられびつくり堯天の泰平にも遊惰の眞似は仕て居られず洒落まで活潑なる氣象を起し月も閏々に揮廻す紙上の筆さへ眞直におつ立つ年の初刊より社員も揃ふて肌を脱き（遊誌外）破目を外して區域を廣くし字數を殖し行を増し大に仕組もあら玉る年と一所に開けて皆さん御笑覽を願ひ升

發行所　東京神田雉子町　**團團社**

天明新誌　毎月第四月曜日發行

紙數大判四十八頁　定價六錢郵税五厘

第壹卷第壹號　一月廿五日發行

目次

●發行の趣旨
●道德と理外の理……博士イビー先生講義
●「我は世の光なり」……博士イビー先生說教
問答　數件
雜錄　數件

發行所　東京日本橋區大傳馬町貳丁目　**大成館**

明治女學校生徒募集廣告

本校第二學年を終り去る十日より亦新たに第…始む、欠員ある級に限り試驗の上入學を許す、…本校に就て承知あるべし、入塾を望む者は塾生…規則は…表を求めらるべし

東京飯田町九段坂上燈臺の屹立せる處　**明治女學校**

交詢案内

（催促する勿れ郵券十錢送れ委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

二一　中働　年齡廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり
二五　召使　十二才以上の小女にて實直なるものを給料一圓にて雇入度處あり

●雇はれたき方（乙）

二四　奉公　年齡廿二才にして一ト通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし
二五　裁縫　裁縫は直ちに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇れたし
二八　奉公　普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ餘暇に產婆術を學び度ものあり
二九　奉公　年齡十四歲にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の脩業致したし
三五　奉公　年齡十五才の高等小學卒業生にして餘暇に勉學の出來候御宅へ雇はれ度ものあり但し給料は望みなし

●喜びのめぐみ

召使　甲第二十四號は去る二日雇入さ爲れり

通信女學**講義錄**　第一卷　一月二十日出版　價金三十二錢　全國一般無遞送料

麴町區富士見町二丁目一番地　**女學雜誌社**

標準 第貳號目錄

一月二十五日發行

◎講壇

○基督の教會……マスター、オフ、アーツ 牧師 小方仙之助

○幽現二樣の教會及吾人の責任……牧師 星野光多

○基教と進化論……理學士 木村駿吉

○眞のイスラエル……牧師 小崎弘道

◎文壇

●基督教徒處世の方針……少教師

●基督教證據論の區域及性質……仲田誠

●罪人の嘆願と神の返答……ラルフ、ウェルス撰

●日本の教會は青年の爲に感謝あかる

●べからず祈禱あかるべからず……三篤子

◎爐邊○四十に一を減したる鞭……石本生○牧會の職重し……默重生○祈禱會○紳商……遵峯外史○ポトマック河上の奇談……失園子譯○女子の問答を聽て感あり……はる子○大學者食を忘報○雜報○英文宗教時事○廣告

……まさを◎書簡●初週祈禱會彙錄附

少教師

更に四頁を增して十六頁となす

◎◎第壹號悉皆出切候に付見本御入用數を增し
◎及び御注文の方へは第貳號より差上可申候◉見本御入用の方は郵券六錢(五厘切手)御送附あれ
◉定價前金一册六錢六册卅三錢十二册六十錢無遞送料

發行所 東京市麹町區富士見町二丁目一番地 標準社

生徒募集廣告

本所是迄本科生を限り傳習致し居候處今回歐米各國の衣服裁縫に熟練の教師を聘し衆人の便利を量り更に速成科を追加し裁方縫方共懇篤に(和洋とも)教授す有志の者は規則一覽の上入學あらんとを

本郷區東竹町二十五番地

渡邊洋服裁縫傳習所

遞信省認可

注意社告

前金切の節は雜誌の封紙に朱印の半錢形を捺す、之によりて前金を廻送あれ、然らざれば一時發送を見合す。

代金を送らるゝには通運便又は郵便小爲替にて麹町郵便局へ當て御振込被下候樣奉願上候。

發兌

一月。一日 十一日 十八日 廿五日

二月。一日 八日 十五日 廿二日

三月。一日 八日 十五日 廿二日 三十日

定價

一册。六錢 郵稅。五厘 (但府內無郵稅)

十册。五十八錢郵稅。五錢 (同前)

半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓五十六錢

一年分 二圓六十錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢

同 三回以上 一割引

同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.56 six month *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 1B. FUJIMICHO 2CHYOME, KOJIMACHI, Tôkyô, Japan.

明治二十三年一月廿四日印刷
明治二十三年一月廿五日出版

發行所 東京麹町區富士見町二丁目一番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京麹町區富士見町二丁目一番地寄留 巖本善治

印刷人 東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留 森田豐

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY